



道の駅 × 大学

連携事例発表会

2025年3月12日



国土交通省

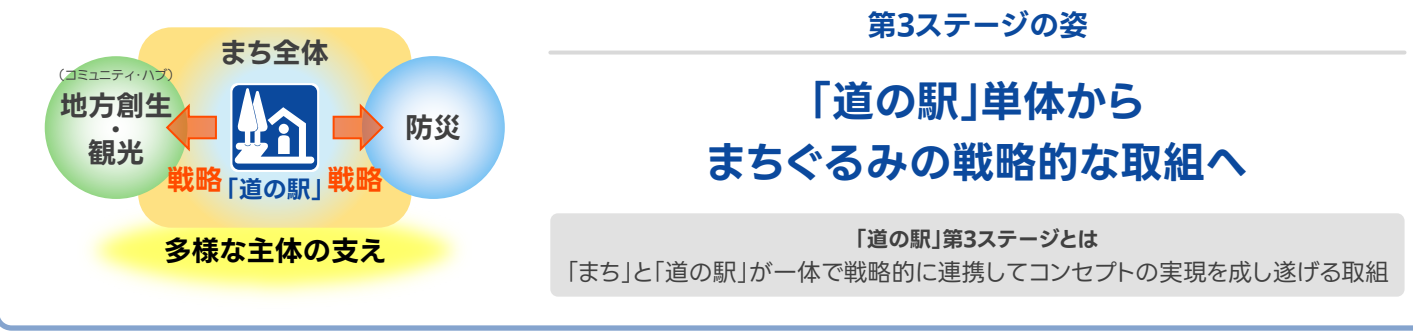
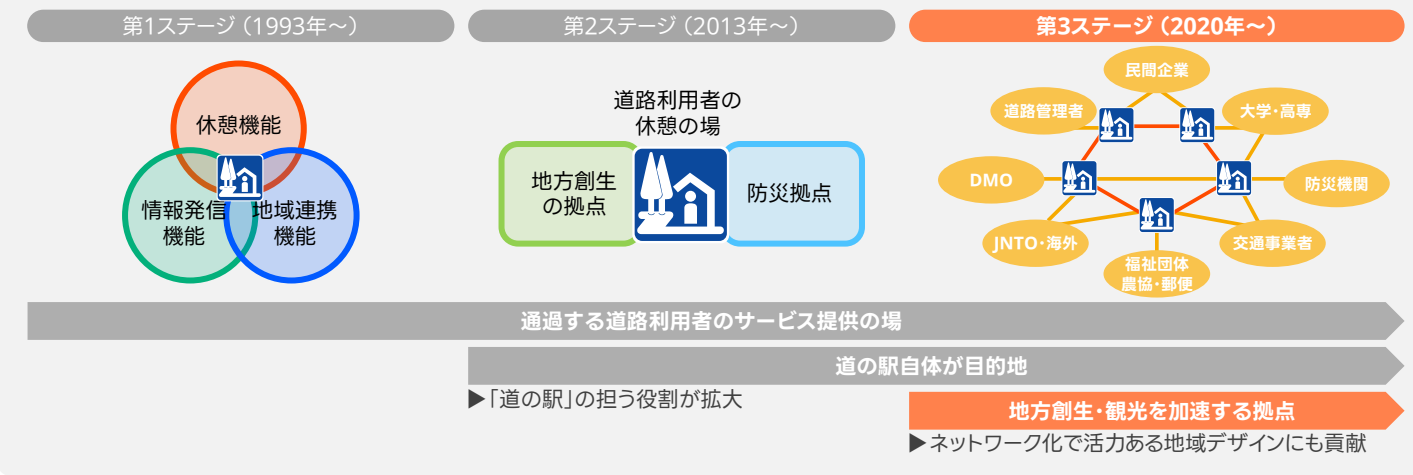
はじめに

「道の駅」と大学の連携について

●「道の駅」第3ステージの推進

1993年の「道の駅」制度創設より約30年が経過し、各地域がそれぞれに工夫を凝らすことで、現在では全国に1,230箇所（2025年1月末現在）の多様な「道の駅」が誕生しています。はじめは通過する道路利用者へのサービス提供が主たる機能でしたが、「道の駅」の持つ地域との連携機能は次第に役割を増し、「道の駅」自体が目的地となるような箇所も増えてきました。このような変遷を「第1ステージ」「第2ステージ」と呼称し、2020年からは「**地方創生・観光を加速する拠点**」を目指す「**第3ステージ**」が進行中の段階にあります。第3ステージは、「まち全体」を中心にコンセプトを共有し、「まち」と「道の駅」が戦略的に一体で進める取組であると方針づけられています。

各ステージのコンセプト



●大学と連携した取組の推進

「道の駅」があらゆる世代が活躍する舞台となる地域センターとなることを目指し、大学と「道の駅」の連携を進めてきました。地域の魅力の集まる「道の駅」と、観光学等を学ぶ若者の交流により、新たな価値の創造を図り、観光・地域づくりを担う将来の人材育成や地方創生にも寄与するものと考えています。大学のほか、民間企業などとも連携し、道の駅を中心として多様な関係者と「まちぐるみ」で地域課題の解決を目指します。

実施イメージ



実施のメリット

大学のメリット

- ・道の駅は、地域の資源が集中し、地方が直面する課題が明確であり、学習するフィールドとして最適

道の駅のメリット

- ・若者ならではの視点、若者の元気による実行力のある企画の実施
- ・SNSや口コミなどを活用した情報発信

TOPIC

道の駅×大学 連携事例発表会 ―産官学連携で地域課題解決へ―を開催しました



2025年3月12日、国土交通省が主催し『道の駅×大学 連携事例発表会 ―産官学連携で地域課題解決へ―』を開催しました。当日は大学の教職員や学生、国土交通省関係者などが会場に集結し、13大学が「道の駅」と連携した取組について発表しました。

発表では、これまで「道の駅」と大学が連携して取り組んだ内容のほか、**連携のきっかけや連携体制、継続的に取り組むうえで工夫した点や苦勞した点、資金の調達方法**など、普段取り組んでいるからこそ分かる現場の声がたくさん登場しました。**質疑応答**では、「取組を始めた際の資金はどのように工面していたのか」や、「授業の一環として実施する際の難しさはあったか」などの質問が飛び交い、今後の取組の参考になる話が多く聞かれました。発表会はオンラインでも配信し、全国から100人近くの関係者が聴講しました。**配信の様子は右記の二次元コードから視聴可能です。**

会場では、各大学が開発した商品や作成したパンフレットを持ち寄り、実際に手に取るなどして互いの取組を知ったり、情報交換したりする機会となりました。終了後のアンケートでは、現地参加者、Web参加者ともに満足度が高く、大学連携の取組に対する期待の高さが窺えました。

発表動画公開中！



<https://youtu.be/KtjI48jxesw>
※YouTubeが開きます



発表の様子



参加者同士の懇親の様子



開発した商品や紹介パネルの展示

INDEX 発表一覧

ページ		大学	道の駅	道の駅立地自治体	道の駅 管轄地整 ・開発局	内容 (順不同)	大学の 活動形態	連携協定等	関係者 (大学、指定管理者、 自治体以外)	概要
5	01	函館大学	× 道の駅なないろ・ななえ 道の駅しかべ間歇泉公園	北海道七飯町 北海道鹿部町	北海道	●商品開発 ●イベント ●観光振興 ●インターン	正課外 活動	大学⇄指定管理者 (包括連携協定)		継続的な実践を通して 道の駅、地域、世界をつなぐ 2駅をつなぐランツーリズムの企画・実施、地域の特産品を使った商品開発、台湾 の学生とともにインターンシップの実施、プライベートブランド構築など。
7	02	近畿大学	× 道の駅川俣	福島県川俣町	東北	●商品開発	ゼミ (複数)	大学⇄設置自治体 (包括連携協定)	食品会社、 農業従事者	大学の専門分野を横断し 地域資源を最大限に活用した商品開発 3研究室・ゼミが連携し、地域資源を活用した商品開発・販売。農学部が企画提案 し、パッケージやPOP等のデザインは文芸学部が担当。
9	03	東京農業大学	× 道の駅常総	茨城県常総市	関東	●商品開発	学生団体	大学⇄設置自治体 (包括連携協定)		ニーズ調査からオペレーションまで 学生主体の実践的なメニュー開発 食堂のメニュー開発。オペレーションの難易度や収益性も加味し、最終的には実際 に食堂で提供。SNS等を利用したPR活動も実施。
11	04	城西国際大学	× 道の駅みのりの郷東金	千葉県東金市	関東	●商品開発 ●イベント ●観光振興 ●広報	正課授業	大学⇄設置自治体 (連携協力の覚書)	農業従事者、 まちづくり事業者	道の駅から市内へ、市内から周辺地域へ 行政境界を超えた観光ブランディング まち歩き的活動、サイクルツーリズムの活動の両者における、コース制作とイベント 実施。観光連盟と連携し、市外の周辺地域にも活動を広げる。
13	05	千葉商科大学	× 道の駅オライはすぬま 道の駅いちかわ	千葉県山武市 千葉県市川市	関東	●商品開発 ●イベント	ゼミ	学部⇄設置自治体 (連携協定)	農家、地元企業	ソーシャルビジネスの視点を持ち 商品、ビジネスの仕組み、人のつながりを作る 地元農産物を使用した商品開発。常設販売ブースを設置するなどビジネスの仕組 みを構築。付属高校とも連携。田んぼアートを通じた地域交流イベントも運営。
15	06	拓殖大学	× 道の駅富士川	山梨県富士川町	関東	●商品開発 ●イベント ●調査・研究	ゼミ (複数)	大学⇄設置自治体 (包括連携協定)	食品会社、 建設企業社長	継続的に取り組み 大学・道の駅・参加学生の「三方よし」状態を構築 新商品の開発、マーケティング・リサーチの実施と新規事業提案、町などと連携し たシンポジウム開催など。2017年から継続的に活動を実施。
17	07	長野大学	× 道の駅女神の里たてしな	長野県立科町	関東	●商品開発 ●イベント ●広報 ●計画策定	ゼミ	大学⇄地元商工会 (連携協定)	生命保険会社、 まちづくり協議会	商品開発から改修計画まで幅広く 客観的な視点に基づき道の駅の魅力向上へ イベント実施、商品開発、パンフレット・ポスター制作、改修計画策定と社会実験実 施など。2017年の開業時から連携している。
19	08	長野大学	× 道の駅あおき	長野県青木村	関東	●商品開発 ●イベント ●観光振興 ●計画策定 ●VI制作	ゼミ		地域おこし協力隊	道の駅を起点とした観光振興に取り組み 新たな観光スタイルを提案する 道の駅を起点とした観光振興プログラムの計画とイベント実施、商品開発、駅内施 設の整備計画、駅のビジュアルアイデンティティ制作など。
21	09	金沢星稜大学	× 道の駅めぐみ白山	石川県白山市	北陸	●広報 ●調査・研究	ゼミ	大学⇄設置自治体 (包括連携協定)	鉄道体験施設	道の駅と近隣施設で横断的に活動し 一体的なにぎわい創出を目指す 地元特産品のSDGs商品としての情報発信のほか、近隣施設「トレインパーク白 山」と連携した来場者交通情報調査、施設の紹介動画作成を実施。
23	10	愛知大学	× 道の駅とよはし	愛知県豊橋市	中部	●商品開発	正課外 活動	大学⇄設置自治体 (包括連携協定)	果樹園、農家	学生有志、道の駅、地元農家による活発な活動が生み出す地元密着商品 地元食材を使用した商品開発。道の駅やクリエイティブディレクターの講座を開催 し、知識を得たうえで、コンセプト、味、パッケージデザインを決め、販売。
25	11	立命館大学	× 道の駅志原海岸	和歌山県白浜町	近畿	●イベント	ゼミ			地域との積極的な関わりが生む信頼と成果 地域ブランディング強化に向けた取組 地域ブランディング強化の一環として、「日置川アドベンチャーフォトコンテスト」を 開催。クラウドファンディングで資金調達し、地域を巻き込んだ活動に。
27	12	広島経済大学	× 道の駅みはら神明の里 道の駅西条のん太の酒蔵 道の駅来夢とごうち	広島県三原市 広島県東広島市 広島県安芸太田町	中国	●商品開発 ●広報 ●調査・研究	ゼミ		農家、食品会社、 調査会社	複数の道の駅で調査・実証事業を実施し 6次産業化のネットワークを形成 複数の道の駅を横断した調査・実証事業の実施と、その結果を基にしたイベントの 開催。また、行政機関や農家と連携した商品開発と販売実習の実施。
29	13	香川大学	× 道の駅とよはま 道の駅大坂城残石記念公園	香川県観音寺市 香川県土庄町	四国	●商品開発	正課授業	大学⇄設置自治体 (包括連携協定)	協力会社 (水産、製菓、 印刷、デザイン)	授業の枠組みで多様な関係者と連携し 企画の実現につなげる 全学共通科目において、学生が複数班に分かれて商品開発などに取り組む。実現 にあたり、地元企業や地域おこし協力隊とも連携。
31	14	愛媛大学	× 道の駅風早の郷風和里	愛媛県松山市	四国	●商品開発 ●イベント ●観光振興	正課授業	大学⇄設置自治体 (連携協定)	農業従事者	学生がPDCAサイクルを回しながら 段階的に活動を広げる 商品開発、新規イベントの企画・運営、SDGsスタディツアーの開催など。1・2年生 の講義として2017年から実施し、地域との関係を深化。

01 継続的な実践を通して 道の駅、地域、世界をつなぐ

函館大学 × 道の駅なないろ・ななえ 道の駅しかべ間歇泉公園
かんけつせんこうえん

● 取組概要

道の駅	
なないろ・ななえ	
所在地	北海道七飯町
開駅年	2018年
設置者	七飯町
運営者	一般社団法人七飯町振興公社

▶ **道の駅・地域の課題**

- 地域活性化。

- ▶ **活動方針**
 - 地元で生産された食材を使用し、地域活性化につなげる。
 - ▶ **取組1** **取組3**

- ▶ **成果**
 - ・ インターンシップ受入による人材交流の促進。
 - ・ 新商品のマーケティング調査協力。
- ▶ **課題**
 - ・ 道の駅側の受入体制。(まだ初回と言う事もあり、継続的に受け入れをできる体制では無い)

道の駅
しかべ間歇泉公園

所在地 北海道鹿部町
開駅年 2016年
設置者 鹿部町
運営者 株式会社シカベンチャー

道・駅の課題

- ・ 周辺エリアの道との連携が弱かった

▶ 活動方針

- 道の駅の新たな活用。
 - ▶ 取組1
- 新たな客層へのアプローチ。
 - ▶ 取組1
- 地域の産業との関わり。
 - ▶ 取組1

成果

- ・新たな客層の利用につながった。
- ・地域の惣菜店や温浴施設へ経済効果を産出することができた。

課題

- ・事業の自走化。

連携のきっかけ・経緯 | 学生発の商品開発・ビジネスモデルに対して日ごろから相談をしていることがきっかけ。(学生が相談、教員が予備的に相談)

函館大学 地域創造プロジェクト	
種別	私立
所在地	北海道函館市
担当教職員	佐藤 浩史 商学部准教授 高橋 和将 地域連携センター長
活動人数	10人程度
研究テーマ	地域の課題をビジネスで 解決する
活動内容	フィールドワークを手法に して、道南各地で商品開 発、ビジネスモデルの創出 など

▶ **日頃の活動方針、傾向**

- ・ 学生はPBL（課題解決型学習）を実践する。地域と協働するというコンセプト。

▶ **道の駅との取組前の課題**

- ・ 活動資金、プロジェクト資金など資金面。学生をまとめる大人のマンパワー不足。

活動方針

- 学生にはアクティブに活動してもらおう。PBLを実践させる。
 - 取組1 取組2 取組3
- 市内の地域連携センターと協働する。
 - 取組1 取組2 取組3

- ・開発した軽食の商品化(継続販売中)
- ・国際人材インターンシップ実施。
- ・プライベートブランドのブランディング。(シードル、豆腐スフレッド(継続中))

課題

- ・活動人数の確保と学生のモチベーションの維持。
- ・活動の受け皿となる大人の人数

● 取組の内容

取組1 | 2022年～継続中
道の駅をツーリズムステーションに
 スポーツツーリズムで道の駅と地域を活性化

- **ランツリーズムの企画・実施**
 - ・ 道の駅「なないろ・ななえ」と道の駅「しかべ間歇泉公園」をつなぎ、ランツリーズムによる地域活性化を道の駅で実現する。
 - ・ プロモーションや初期投資、ルートの安全性などが課題。
- **地域の特産を使った商品開発（販売中）**
 - ・ 利用者の利用後の栄養補給のため、地域の特産を使った商品開発を併せて実施。
 - ・ 地元事業者との協働で軽食（ななえ：ホットドッグ「ななドック」、しかべ：弁当）を開発。
 - ・ 食品系開発の標準的なプロセスである味や持ちなど打ち合わせが多頻度で学生の予定調整が課題。連携センターや担当教員のサポートで時間的な抜けがないように心がけた。

取組2 | 2024～25年

国際高度人材育成の場 (インターンシップ)

- ## ● インターンシップの実施
- ・ 高度国際人材の地方定着を目指しインターンシップを道の駅で実施した。
 - ・ これまでも台湾の大学と連携があり、今回は台湾・長栄大学の国際人材と道の駅をつないだ。
 - ・ 道の駅と国際人材の間でコミュニケーションの齟齬などが懸念された。これを軽減するためにパディ制を用いた。(国際人材2名に日本人学生1名のセット)
 - ・ 地元側では初めての取組ではあったが経験値は上がった。日本人学生が間に入っただけで負担が軽減された。

取組3 | 2024年～継続中 道の駅がないろ・ななえ

プライベートブランド(PB)の構築

- ## ●道の駅オリジナルのPBを構築する 道の駅のプロジェクトへの参加
- ・ 地域の特産であるリンゴを活用したアルコール飲料(シードル)と地元豆腐製造事業者による豆腐スプレッドを開発し、販売。また、リンゴと豆腐スプレッドを使用したシュークリームも販売予定。
 - ・ 主にマーケティング等のプロモーションを担当する。
 - ・ 学生の活動時間の確保とプロモーションの実践感覚の定着が課題。
 - ・ 現在オフサイトの勉強会を実施しながら活動中。

地域 **北海道**

内容 ●商品開発
●イベント
●観光振興
●インターン

● 連携体制・関係者

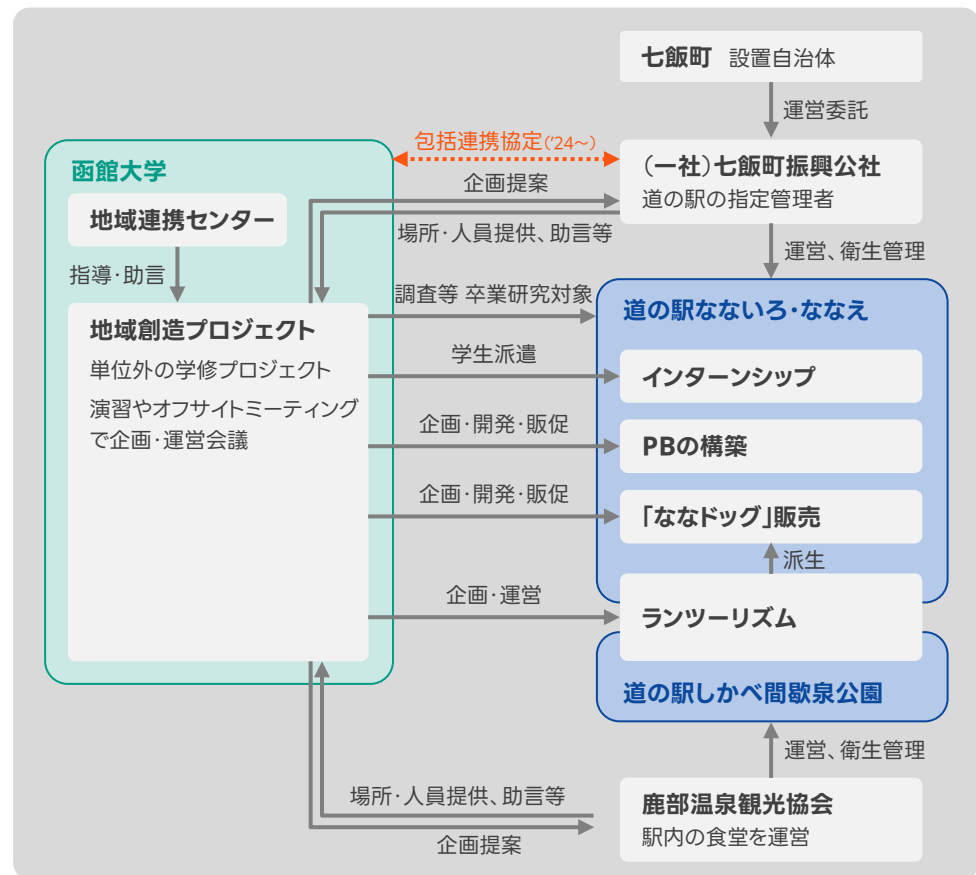


写真1 開発商品 豆腐スプレッド(’25)



写真2 ななドックテストマーケ('24)



写真3 道の駅「なないろ・ななえ」でのインターンシップ('25)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 学生の関心とモチベーションを維持するためのペースの調整

学生の関心とモチベーションの維持のために日ごろから意識付けをすること。オフサイトでの勉強会やミーティングなどやりすぎないように、しかし、必要なだけやることが難しくリモートなどで対応した。

Point 2 ▶ アイデアだけで終わらせない

アイデアで終わらせることがないように、実践感覚を道の駅から学生に伝えてもらうこと。身内では甘えが生じることがある。現場にできるだけ連れていくことが重要であるが議論や交渉の経験がないことから、教員はOJT的に同行した。後に自分で行ける場合は自分でやらせる。

● 今後の取組・活動の展開

道の駅をつなぎ、道南道の駅をネットワーク化すること。道の駅「なないろ・ななえ」「しかべ間歇泉公園」のほか、道の駅「みそぎの郷 きこない」(木古内町)も加え、商品や観光でつなぐコンテンツを企画中。

02 大学の専門分野を横断し 地域資源を最大限に活用した商品開発

近畿大学 × 道の駅川俣
かわまた

● 取組概要

道の駅 川俣 所在地 福島県川俣町 開駅年 1992年 設置者 川俣町 運営者 川俣町 「かわまた銘品館シルクピア」は (株)川俣町農業振興公社が運営	道の駅・地域の課題 ・人口減少。	活動方針 ・地元食材を使った商品開発、販売。 ▶ 取組2	成果 ・商品として販売の実現、特産品となる。 課題 ・商品の継続販売。 ・さらなる商品開発。
--	----------------------------	---	--

連携のきっかけ・経緯 | 2011年の東日本大震災発生直後から、近畿大学が川俣町の復興支援を開始し、現在まで各種分野での支援・連携を継続している。その中で、地元ニーズを踏まえ、2018年度より、農学部が中心となり、商品開発・販売関連の連携活動に着手している。

近畿大学

農業経営経済学研究室 農学部 農業生産科学科
栄養教育学研究室 農学部 食品栄養学科
後藤哲也ゼミ 文芸学部 文化デザイン学科

種別	私立
所在地	農学部：奈良県奈良市 文芸学部：大阪府東大阪市
担当教職員	大石 卓史 農学部教授 明神 千穂 農学部講師 後藤 哲也 文芸学部教授
活動人数	10～20人程度
研究テーマ	農学部：農業経済、食品栄養、地域活性化、震災復興 等
活動内容	研究・教育活動、地域との連携 等

日頃の活動方針、傾向

- ・東日本大震災からの川俣町の復興支援の一環で、川俣町の地域資源を活用した商品開発とその販売に関する活動を共同で実施。
- ・また、これらの活動を通じて、今後の川俣町や地域社会を担う各種の人材育成(町内事業者、町民、大学生)にも取り組む。

道の駅との取組前の課題

- ・取扱商品の拡充(特に、地域産品)。
- ・道の駅の魅力向上による来訪客の増加。

活動方針

- ・川俣町役場や町内事業者との間で、密なコミュニケーションをとることで、川俣町関係者と近畿大学の間での相互理解の醸成を図りながら活動を実施する。
▶ [取組1](#) [取組2](#)
- ・総合大学としての研究力・教育力・発信力を生かしつつ、近畿大学の総力を挙げて、「オール近大」で活動を実施する。
▶ [取組1](#) [取組2](#)

成果

- ・川俣町の地域資源を活用した商品開発(「かわまたジェラート」(5種)、「かわまたバーガー」(2種)、「川俣シャモすき焼きセット」(アンスリウムスイーツ)(4種))と販売を実現。
- ・共同開発した商品は、川俣町の新たな特産品として定着。各種メディアや町広報等で紹介されたことで、認知度も向上。

課題

- ・さらなる商品開発の実施。
- ・既存商品の原材料(農産物等)の安定供給体制の確立。
- ・他の活動(農業インターンシップ、町内の学校との連携等)との相乗効果の発揮。

● 取組の内容

取組1 2018年度～継続中 各種社会調査の実施 ● 川俣町の地域資源の調査 ・学生と教員が町内でのフィールドワークを実施し、川俣町の農業・食分野の特徴や今後の活動(商品開発含む)等を整理・提案(2018年度)※フィールドワークは2019年度以降も随時実施中。 ・関係者の意向や状況を把握した上で商品開発等の提案を行うことで、活動の実効性を担保。 ● 川俣町民等へのアンケート調査 ・町民アンケート(2021年度)や町内イベント等でのアンケート(随時)を実施することで、町民やイベント来訪者の認知・評価・意向等を把握し、その後の活動へ反映。 ・あわせて、震災復興に関する知見を社会へ発信(学術論文掲載)。	取組2 2018年度～継続中 川俣町の地域資源を活用した商品開発・販売 ● 共同開発した商品 ・川俣町産の農産物等を原料に使用した「かわまたジェラート」(5種)。 ・川俣町の特産品である川俣シャモ(2022年にGI(地理的表示)に登録)を原料に使用した、「かわまたバーガー」(2種)、「川俣シャモすき焼きセット」。 ・川俣町の特産品であるアンスリウムの形を模した「アンスリウムスイーツ」(4種)。 ● 取組内容 ・近畿大学農学部から川俣町関係者に企画提案し、試作・試食調査等を経て、商品化。 ・パッケージやPOP等のデザインは近畿大学文芸学部も協力。 ・共同開発した商品は、道の駅かわまた等で町内事業者が販売(一部は川俣町のふるさと納税の返礼品にも採用)。 ・川俣シャモまつり等のイベントに出店し、学生達が対面販売・PRを実施。 ・周辺の道の駅との連携企画も実施(かわまたバーガー)。
--	--

地域 **東北**
内容 ● 商品開発

● 連携体制・関係者

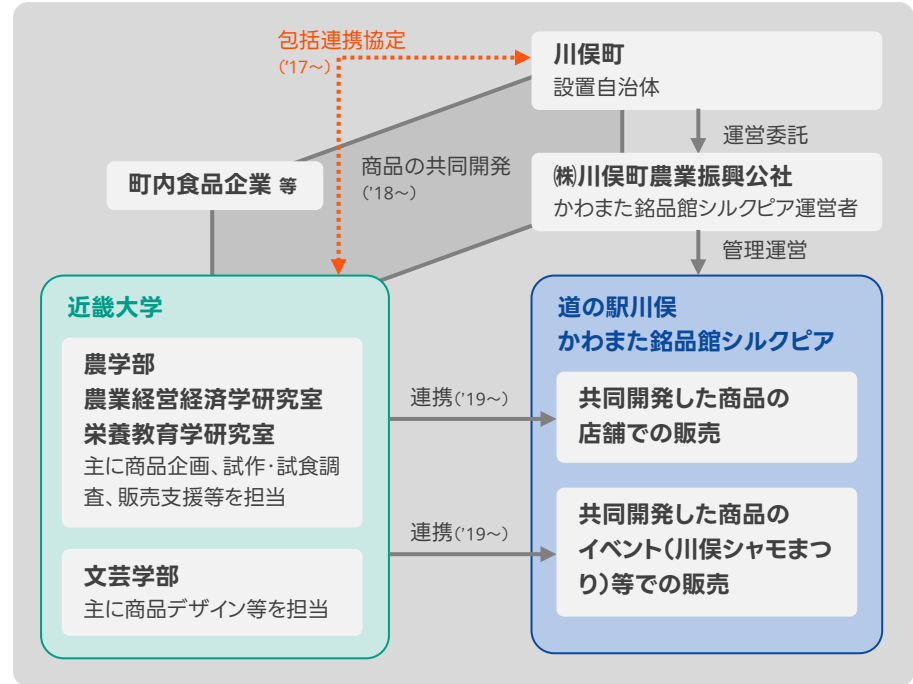


写真1 道の駅でのジェラートのPR('22)



共同開発した商品('19～'24)



写真2 川俣シャモまつりに出店した様子('24)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 川俣町関係者と大学の間でWin-Winの関係性を構築

- ・川俣町役場や町内事業者と大学との間で、密なコミュニケーション(定期的な打合せや各種の連絡・調整・共有等)をとることで、川俣町関係者と近畿大学の間での相互理解の醸成を図っている。
- ・その結果として、川俣町関係者と近畿大学の間で、復興に向けた連携・協働というWin-Winの関係性が構築されてきている。

Point 2 ▶ 「オール近大」での活動の展開

- ・総合大学としての研究力・教育力・発信力を生かしつつ、近畿大学の総力を挙げて、「オール近大」で事業を実施している。
- ・商品開発・販売についても、農学部を中心としつつも、文芸学部や他の学部・研究所等の学生・教職員とも連携・協力しながら活動を展開している。
- ・大学の自主財源に加え、外部資金(福島イノベーション・コースト構想推進機構「大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業」)も活用して活動予算を確保し、多様な成果を社会へ還元している。

● 今後の取組・活動の展開

- ・新たな商品開発・販売の実施(かわまたジェラート、アンスリウムスイーツ 等)
- ・新たな連携・協力者の獲得(町内事業者(農業者含む)、学校関係者、町民、周辺の道の駅 等)
- ・共同開発した商品や連携活動の認知度向上、新たなファンの獲得 等

03 ニーズ調査からオペレーションまで 学生主体の実践的なメニュー開発

東京農業大学 × 道の駅常総
じょうそう

● 取組概要

道の駅常総	道の駅・地域の課題	活動方針	成果
所在地 茨城県常総市 開駅年 2023年 設置者 常総市 運営者 TTCグループ (株式会社TTC ・株式会社COLLECT)	- 農業従事者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加といった問題に直面していた。 2015年の関東・東北豪雨による水害からの復興も重要な課題。	- 学生の柔軟な発想と弊社の商品開発力を生かして、新たな茨城の魅力を発信すること。 - 取組1 - 学生に地域活性化のやりがいや、魅力を知っていただき、地域活性化の裾野を広げること。 - 取組1	- 掲載されているメニューを開発し、大好評を得た。 〈売上実績〉 「とろとろ肉豆腐いなほ定食」「いなほのおやこ丼」「いなほ・え・び・風呂ラーメン」の3品合計で289万円の売上実績。 - 課題 - どこまでを学生が担うかにより、難易度が変化するため、最適な役割分担が課題と考えている。

連携のきっかけ・経緯 | 2020年12月に東京農業大学と常総市が包括連携協定を締結し、常総市で進められる食と農と健康の産業団地「アグリサイエンスバレー常総」を基盤に東京農業大学との連携を進めている。この一貫として、もぐもぐProjectと道の駅「常総」による取組を開始した。

東京農業大学 もぐもぐProject 国際食料情報学部 食料環境経済学科

種別	私立
所在地	東京都世田谷区
担当教職員	野口 敬夫 教授
活動人数	約30人
研究テーマ	地域の特産品を活用した商品開発や地域活性化
活動内容	「生産者と消費者の架け橋になる」という理念を掲げ、規格外品を使用した新商品づくり

日頃の活動方針、傾向

- 食を通じた地域活性化や食育促進を目的に、学生主体で活動するプロジェクトであり、地域食材を活用した商品開発やマルシェ開催を通じて食の魅力を発信し、食品ロス削減や食文化の継承にも積極的に取り組んでいる。

道の駅との取組前の課題

- 地域食材や規格外食材の認知度向上、消費拡大への効果検証など、学生主体ならではの企画・運営力の強化が課題。
- 農家などとの継続的な関係構築や食品ロス削減、食文化継承への効果的なアプローチ方法、マーケティング方法の模索が重要な課題。

活動方針

- 地域食材を活用した商品開発に基づき、地域農産物の魅力を発信。
 - 取組1
- 産学官連携を通じて、学生のアイデアや研究成果を地域振興につなげる。
 - 取組1
- 道の駅を拠点に、食育や地産地消の普及活動を実施。
 - 取組1

成果

- 地域の特産品を生かしたメニュー開発や価格設定、ターゲットに合わせた販売戦略を考える貴重な実践の場となった。さらに、道の駅との連携を通じて、地域資源を活用する意義を学び、地域活性化に貢献する取組の重要性を実感した。

課題

- コラボメニューをより多くの人に楽しんでもらうために、販売期間の延長や、PR活動の拡大など、販売戦略のさらなる工夫が必要である。加えて、道の駅側とのさらなる連携強化も求められる。

● 取組の内容

取組1 | 2023年～継続中

道の駅常総 いなほ食堂メニュー開発

● 地域農産物の魅力を知る

- 2024年の活動や関連情報調査を通して特産品・旬の食材ニーズについて理解を深める。

● 地域食材を活用した商品開発

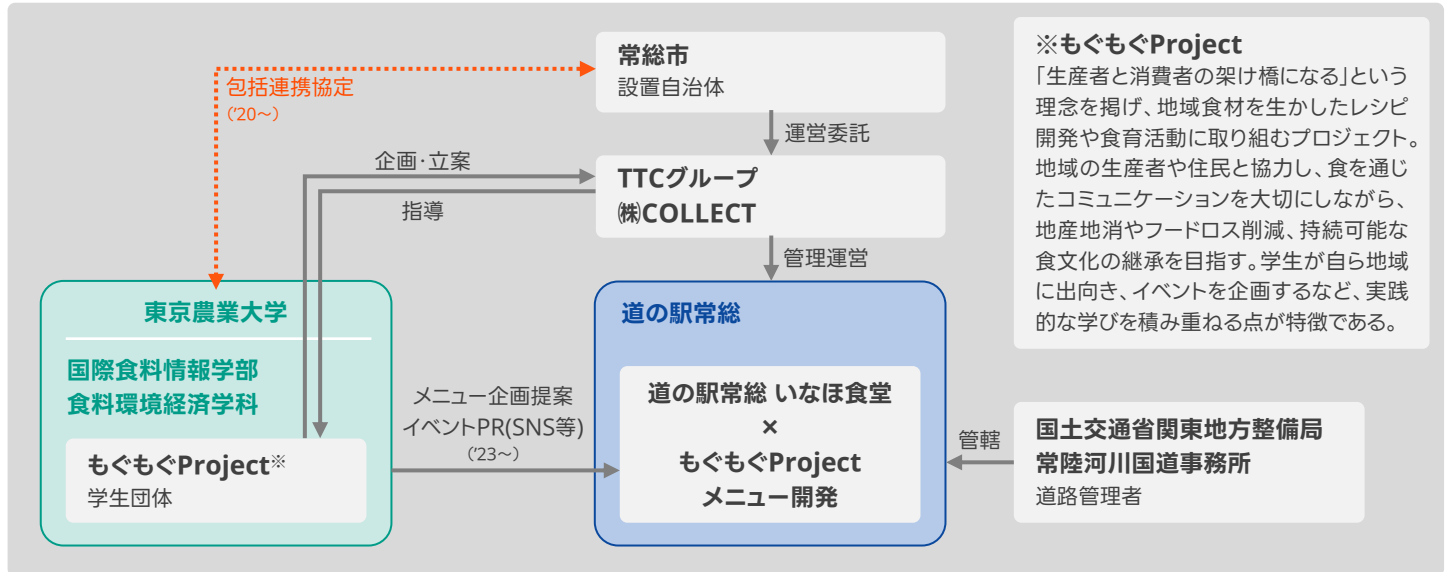
- 学生と道の駅が連携し、地元食材を生かした新商品のアイデアを検討。
- 試作を重ね、道の駅「常総」いなほ食堂で販売可能なメニューを開発。

● 道の駅「常総」いなほ食堂での販売・PRへの展開

- いなほ食堂での販売、道の駅「常総」や「もぐもぐProject」のSNSを活用しPR。このPR活動を通じて、観光客や地域住民に広く周知。
- 宣伝用ポスターをいなほ食堂メンバー、グラフィックデザイナーと学生が共同作成し道の駅やSNSなどで発信。
- 3年目以降、継続的に新メニュー開発や食育活動を展開。

地域	関東
内容	商品開発

● 連携体制・関係者



※もぐもぐProject

「生産者と消費者の架け橋になる」という理念を掲げ、地域食材を生かしたレシピ開発や食育活動に取り組むプロジェクト。地域の生産者や住民と協力し、食を通じたコミュニケーションを大切にしながら、地産地消やフードロス削減、持続可能な食文化の継承を目指す。学生が自ら地域に出向き、イベントを企画するなど、実践的な学びを積み重ねる点が特徴である。



試食の様子（'24）



いなほ食堂・グラフィックデザイナー・もぐもぐProjectで作成したポスター（'24）



とろとろ肉豆腐いなほ定食



いなほ・え・び・風呂ラーメン



いなほのおやこ丼

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 関連情報を調査しニーズや人気商品の分析

市場調査を通じて、地域のニーズや人気商品の傾向を把握。コンセプトを明確化し、ターゲット層に響くメニューを検討することで、消費者に受け入れられやすいメニュー作りを目指した。

Point 2 ▶ 茨城県の食材を生かした料理や観光客向けのメニュー考案

茨城県ならではの食材を活用し、茨城県の魅力を伝えるメニューを提案。観光客にも楽しんでもらえるよう、食体験としての価値を高める工夫を加え、地域振興にも貢献する取組を行った。

Point 3 ▶ オペレーションや収益性なども加味

《道の駅の視点》ただ楽しく商品開発できればいいではなく、学生の意向を最大限反映させながらも、オペレーションの難易度や収益性も加味した上で、机上の空論ではない、より本番に近い商品開発を体験させる。

● 今後の取組・活動の展開

今後も茨城県常総市の魅力発信を促進し、特産品を活用した新たなメニュー開発やイベントでの企画にも積極的に挑戦していく。道の駅を拠点とした継続的な取組を展開し、次回以降の企画や地域の活性化につなげていく。

04 道の駅から市内へ、市内から周辺地域へ 行政境界を超えた観光ブランディング

城西国際大学 × 道の駅みのりの郷東金
さととうがね

● 取組概要

道の駅 みのりの郷東金 所在地 千葉県東金市 開駅年 2014年 設置者 東金市 運営者 東金元気づくり株式会社	道の駅・地域の課題 - 将来に向け、農業者をはじめとした出荷者の確保。 - 休日等は直売所売場面積、駐車場数が不足。	活動方針 - 東金市の地域振興に資する連携。 - 取組1 取組2	成果 - イベント参加者への東金市、地域産業及び「みのりの郷東金」のPRにより、認知度の向上、来訪者及び関係人口の増加が見込まれる。 課題 - プロジェクト開始前から関係団体の役割を調整するなど、事業をスムーズに進行するために、準備段階の工夫が課題である。
---	---	--	--

連携のきっかけ・経緯 | 2022年、観光学部が千葉県鴨川市から東金市へ移転するに際し、城西国際大学と東金市との連携協定を補填するかたちで、「観光の振興に関する連携協力」という覚書を締結し、東金市商工観光課とともに道の駅に関わる「観光に寄与する取組」を始めることになった。

城西国際大学 全学共通基盤科目 「域学共創プロジェクトB」

種別	私立
所在地	千葉県東金市
担当教職員	金子 祐介 観光学部助教
活動人数	20人前後
研究テーマ	サイクルツーリズム
活動内容	道の駅を基点とした観光振興に寄与するプロジェクト型授業

日頃の活動方針、傾向 - 地域経済の発展や地域のにぎわいを創出するため、道の駅を基点とした観光産業に寄与する取組を実施。 道の駅との取組前の課題 - 活動を始める以前は、学内に観光振興に寄与する地域課題について話し合うプラットフォームが無かった。そのため、地域の活動に学生を参加させ、観光に関わる若者の意見を地域のまちづくりの中に反映することが課題であった。

活動方針 - 東金市との連携協定にもとづき、東金市の観光コンテンツ作りにもとづき、(1)まち歩きイベント事業 (2)サイクルツーリズム事業 (3)観光パンフレット制作などを実施。また、(4)観光庁補助金事業への参加なども地域の方々との協力のもと実施。 - 取組1 取組2

成果 - 大学の地域活動を地域の新聞やテレビなどメディアが取り上げてくれるようになった。 - 学生の視察先での学びを地域の方々へ聞き取り地域活動に生かしてくれるようになった。 課題 - 近隣地域における類似活動と予算確保面で競合が生じている。 - 授業を社会実装化することにハードルがある。

● 取組の内容

取組1 2021年度 2022年度以降は「駅からハイキング」へ移行(～2023年度) まち歩きによる地域資源をつなぐ活動 Park and Walk プロジェクト「東金トコトコ」 ● Park and Walk として「まち歩き」コース制作とイベントを実施 ①Park and Walk の基点として道の駅を利用。 ②「まち歩き」用のお弁当の開発。 ③「まち歩き」コースの中継地点となる企業の検討。 ④「まち歩き」のためのドリンク開発。 ⑤ 地域のPR音声配信を道の駅店内で実施。 ⑥ 道の駅コラボ切符作成配布。 ⑦ 学内Webサイトでの広報活動。 ⑧ 活動概要を紹介するフリーペーパーを作成配布。	取組2 2022年度～継続中 サイクルツーリズムによる地域資源をつなぐ活動 Park and Ride プロジェクト「東金ちゃりんこ倶楽部」 ● 2022年度： Park and Ride として「サイクルツーリズム」コース制作とイベントを実施 ①Park and Rideの基点として道の駅を利用 ②「サイクルツーリズム」コースの中継地点となる企業の検討 ③「サイクルツーリズム」の中継地点で食べる「とっちーの箱入りパーベキューセット」開発 ④道の駅コラボ切符作成配布 ⑤広報活動Instagramの作成 ⑥地域メディアや地域向け授業報告会における広報活動 ⑦他地域におけるサイクルツーリズム推進事業の視察及び報告 ⑧プロジェクトロゴ作成 ※①⑤⑥⑦などは継続して実施。 ● 2023年度： Park and Ride として「サイクルツーリズム」コース制作とイベントを実施 ①東金土産セット作成 ②道の駅を基点とした東金市内サイクルコースMAP作成 ③オリジナルタオル作成 ④「BOSO BICYCLE BASE」(B.B.BASE)乗車客用のマップ作成。 ● 2024年度： Park and Ride として「サイクルツーリズム」コース制作とイベントを実施 ①スタンプラリーブックとスタンプの作成 ②九十九里地域観光連盟との協力体制づくり。 ③B.B.BASE乗客者用お土産グッズ作成(とうもろこしなど山武都市の農作物から検討)。
---	---

● 連携体制・関係者

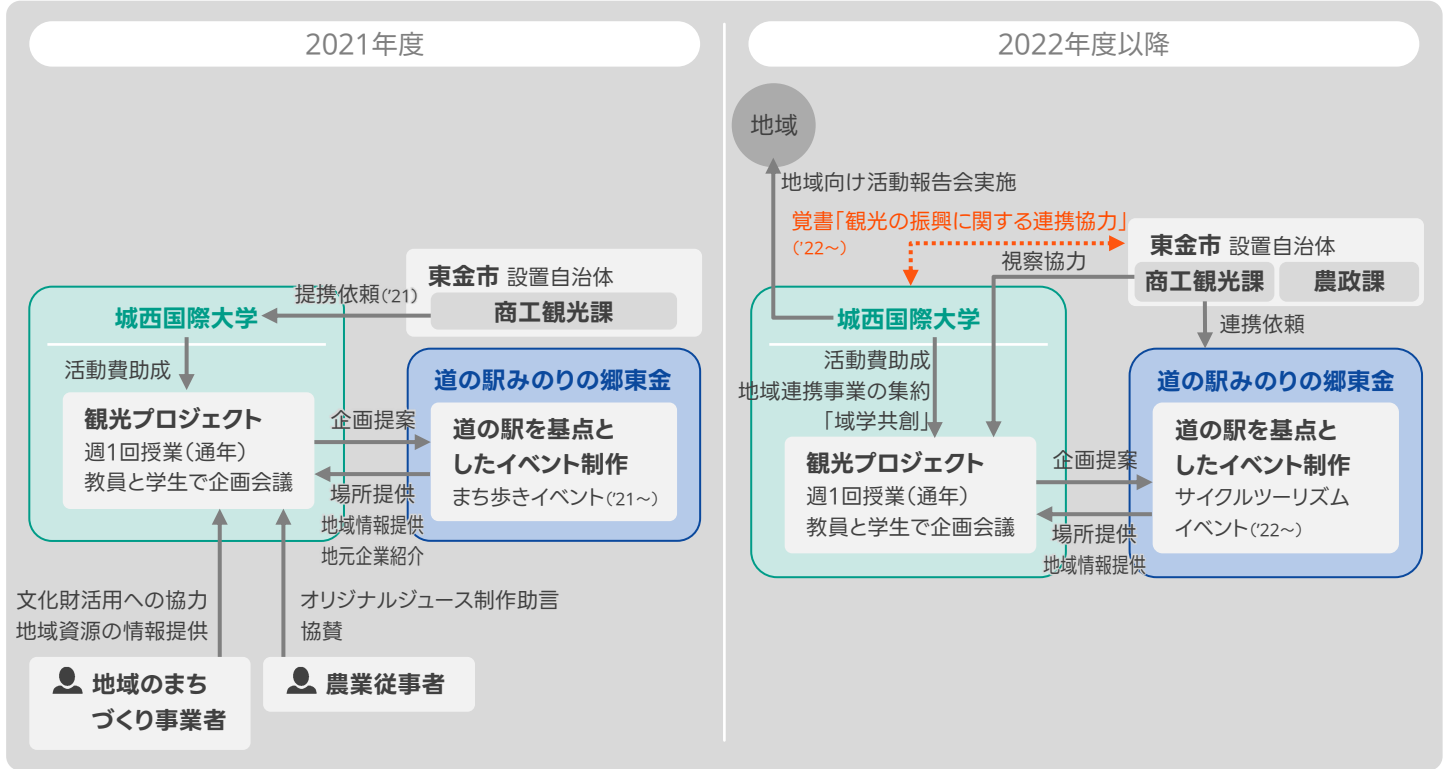


写真1 B.B.BASEに乗ってきたサイクリストの支援事業(24)



写真2 サイクルツーリズムに関わるスタンプラリー用の台紙(24)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 「道の駅を基点とした観光地づくりの組織体制」の構築

《大学の視点》 地域観光を振興する上で、城西国際大学が連携している東金市の商工観光課だけでなく、道の駅を所管する農政課や、B.B.BASE(JR東日本)の企画に関わる地域振興課とも連携する必要がある。このように、行政内の複数部署と協働していく必要があることを踏まえ、商工観光課を中心に、「道の駅を基点とした観光地づくりの組織体制」を構築してもらえないかと依頼している。

Point 2 ▶ 市域にとどまらず、広域で地域全体として取り組む

《大学の視点》 千葉県東金市とだけ連携して観光振興に取り組んでも、他県の方々にとっては「東金市自体に観光のイメージがない」と感じられるため、山武郡市全域で観光ブランディングに取り組む必要がある。そのため、2023年度以降は、九十九里地域観光連盟に関わり、サイクルツーリズム推進に関連する取組において連携してもらえよう依頼している。

● 今後の取組・活動の展開

今後は、九十九里地域観光連盟と行うサイクルツーリズム推進に関わる取組において、各市町の道の駅と連携した取組へと発展させていきたいと考える。まずは、東金市の道の駅「みのりの郷東金」で実践してきたことを横展開できるようにフォーマット化したいと考える。また、東金市が推進するオリーブの産地化へ向けた取組などとも協力していきたいと考えている。

05 ソーシャルビジネスの視点を持ち 商品、ビジネスの仕組み、人のつながりを作る

千葉商科大学 × 道の駅オライはすめま 道の駅いちかわ

● 取組概要

道の駅 オライはすめま 所在地 千葉県山武市 開駅年 2005年 設置者 山武市 運営者 オライはすめま企業組合	道の駅 ・地域の課題 ・特産品を活用した商品開発力。 ・情報発信。 ・高齢・過疎化。	活動方針 ・農家と連携し、地元産品を原材料とした商品開発による商品アイテムの拡大を図る。 ▶ 取組1 取組2 ・地域の特色を生かしたイベントを開催し、地域交流を図る。 ▶ 取組4	成果 ・大学生の視点から道の駅についての意見やさまざまな考えを示してもらい、今後の運営の参考になった。 課題 ・大きなイベントを開催するにあたって予算が必要だが、確保が困難。
道の駅 いちかわ 所在地 千葉縣市川市 開駅年 2018年 設置者 市川市 運営者 日本メックス株式会社	道の駅 ・地域の課題 ・特産品を活用した市川市の情報発信。 ・騒音、駐車場の目的外利用。	活動方針 ・地域の食材を使った特産品の開発・販売。 ▶ 取組1 取組2 取組3	成果 ・市川市産野菜「ピーツ」を使用したドレッシングがドレッシング部門売上No.1に。(道の駅内の月間販売数) ・端材を使用した商品開発が認められ、「商業高校フードグランプリ」で2年連続決勝進出。(付属高校) 課題 ・高校から大学までの7年間を通じた活動を行うことで、大きな成果が期待される。しかし授業との関係もあり、活動時間が限られる。

連携のきっかけ・経緯 | 道の駅オライはすめま

千葉県山武市は、市区町村魅力度ランキングで全国最下位になった経験がある。道の駅「オライはすめま」は、夏休み中は海水浴客で賑わうが、それ以外の時期の観光客誘致が課題であった。そのため、地域を盛り上げたい！との思いから2019年に連携を開始した。2021年からは、山武市応援学生隊(千葉商科大学と山武市の連携協定)の活動の一つとして実施している。

連携のきっかけ・経緯 | 道の駅いちかわ

道の駅「いちかわ」は、千葉商科大学および付属高校から一番近い場所にある。市川市のシティセールスの拠点にしたいという道の駅、大学、付属高校の思いが一致し連携を開始。2024年から千葉商科大学と付属高校が高大連携をしながら活動に取り組んでいる。

千葉商科大学人間社会学部 勅使河原隆行ゼミナール

種別	私立
所在地	千葉県市川市
担当教職員	勅使河原 隆行 教授
活動人数	40人
研究テーマ	コミュニティソーシャルワーク(地域の活性化)
活動内容	地域の活性化に関する取組や、商品開発など

日頃の活動方針、傾向

- ・「商品開発を通じて社会課題を解決する」をメインコピーとして、ソーシャルビジネスの手法を用い、道の駅や地域の方と連携しながら商品開発や観光資源の創造などを実施。
- ・大学では、地域での活動(アクティブ・ラーニング)に力を入れている。

活動方針

- ・社会課題の解決を目指して活動に取り組む。
 - ▶ [取組1](#) [取組2](#) [取組3](#) [取組4](#)
- ・ソーシャルビジネスとして事業性を持つ活動に取り組む。
 - ▶ [取組1](#) [取組2](#) [取組3](#) [取組4](#)
- ・人と人とのつながり(ソーシャルキャピタル)を大切に活動に取り組む。
 - ▶ [取組1](#) [取組2](#) [取組3](#) [取組4](#)

成果

- ・道の駅を拠点に世代の垣根を越えてコミュニティに参加することで学生が変わり(学び)、コミュニティが変化(地域の活性化)した。今後も、道の駅を拠点にした「学びのコミュニティ」で、社会課題の解決および、地域社会のウェルビーイングの実現を目指す。

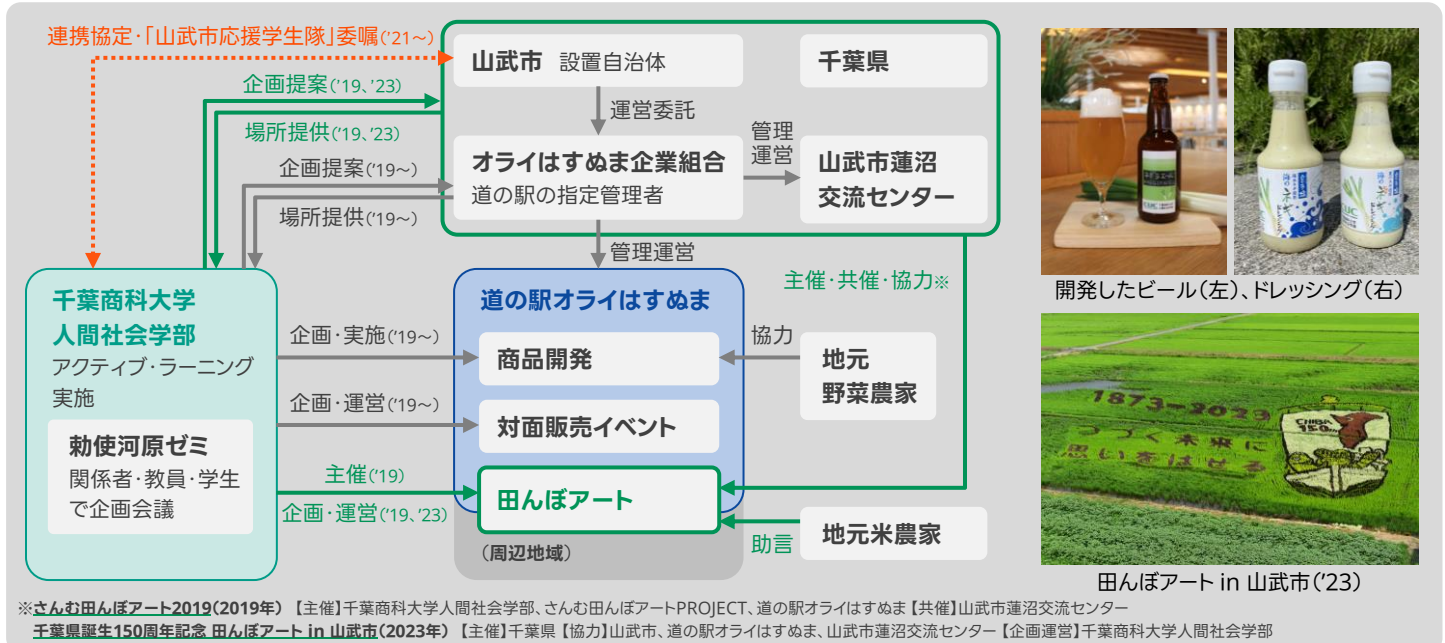
課題

- ・多様化・複雑化する社会課題に対して、ゼミ生(学生・生徒)だけですべてに対応することが困難な状況である。

● 取組の内容

取組1	オライはすめま 2019年～いちかわ 2024年～	取組2	オライはすめま 2019年～いちかわ 2024年～	取組3	いちかわ 2024年～	取組4	オライはすめま 2019、2023年
商品開発を通じて社会課題を解決する		対面販売イベントの定期的な実施		常設販売ブースの設置		「田んぼアート in 山武市」の実施	
● ソーシャルビジネスの視点 ・社会課題を発見し、解決策をビジネスの視点から探ること。 ・利益の最大化ではなく「社会課題の解決」を目的とし、新しい社会的価値を生み出す。		● 開発した商品の販売 ・学生が開発したドレッシングなどを販売。 ・お客様に直接、商品に込めた想いやストーリーを、学生自らの言葉で伝える場になっている。		● 開発した商品の販売 ・単発のイベント販売のみではなく、通年で常設ブースを設置しての販売。 ・大学・付属高校の学生と生徒が連携をして、ブースを展開。		● 田んぼを通じた地域交流 ・「世代や地域、国籍の垣根を越え、多くの人々が一つになって農を体験し、食やアートを通じて交流することで、多様性の理解や地域共生社会の実現を目指すこと」を目的として実施。 ・5月に田植え、7月に鑑賞祭、9月に稲刈りを実施し、田んぼを通じた地域交流を図った。	
● 地元企業(農家)と連携をした商品開発 ・オライはすめま 地元の特産品である、海水ネギを使用した「ネギドレッシング」の開発。 ・いちかわ 市川市産のピーツを使用した「ピーツドレッシング」の開発。 ・地域の活性化や農業への理解。		● 開発した商品の販売 ・単発のイベント販売のみではなく、通年で常設ブースを設置しての販売。 ・大学・付属高校の学生と生徒が連携をして、ブースを展開。		● 田んぼで結婚式 ・千葉県山武市にゆかりのある2組のカップルが「田んぼで結婚式」を挙行した。			

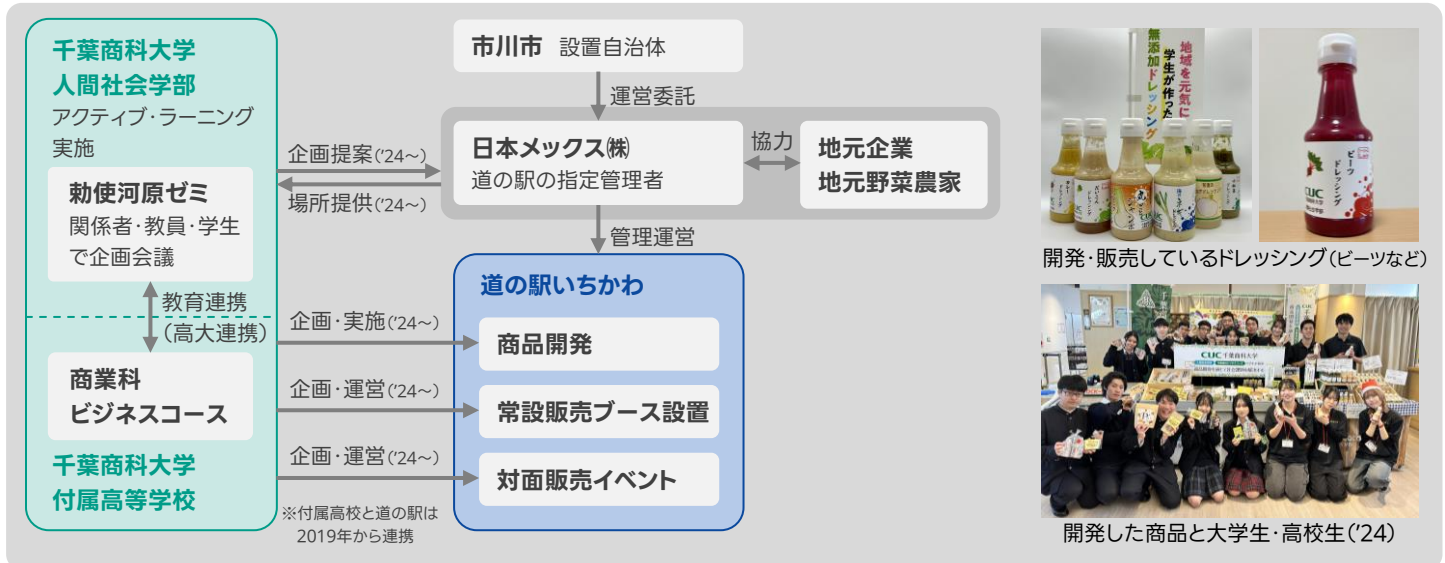
● 連携体制・関係者



開発したビール(左)、ドレッシング(右)



田んぼアート in 山武市(23)



開発・販売しているドレッシング(ピーツなど)



開発した商品と大学生・高校生(24)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 人と人がつながり、Win-Winの関係を構築

《大学の視点》 道の駅を拠点にして人と人がつながり、それぞれがWin-Winの関係になることを意識している。道の駅側は、学びのフィールドの提供、交流の促進、地域資源の提供を行い、学生側は、若い世代(Z世代)の発想、外部からの視点、人的資源の提供を行うことで、道の駅の新しい価値の創造を目指している。

《道の駅の視点》 商品の開発から対面販売まですることは、商品を開発した想いまでお客様へ届けること。このような経験は、学生では簡単に経験出来るものではない。この活動を通じて、学生には地方創生に興味を持ってもらいたい。

Point 2 ▶ ビジネスの視点を持ち、必要な仕組みを作る

継続した連携ができるようにビジネスの視点を持つこと。そのために必要な仕組み(流れ)を作ること。マーケティングをはじめ、原価計算なども学生が実施している。このノウハウを先輩から後輩に実践を通じて伝え(OJT)、世代交代しても継続できるようにしている。

Point 3 ▶ 高校と大学の連携

大学生と高校生と一緒に活動を行うことは、知識や経験値、そして学びの内容に違いがあるため、双方にとって新たな気づきや発見がある。単に商品を販売するというに留まらず、大学と高校という垣根を越えたつながりができることはとても意義があることで、大きなメリットがある。

● 今後の取組・活動の展開

キッチンカーを用い、開発した商品からメニューを考案。移動販売も併せることで多方面にPRを行っていく。

06

ふじかわ

● 取組概要

道の駅 富士川 所在地 山梨県富士川町 開駅年 2014年 設置者 富士川町 運営者 株式会社富士川	道の駅・地域の課題 人口減少	活動方針 - 新しい商品企画、情報発信。 取組1 取組2 取組3	成果 継続可能な商品ができた。
---	---	--	--

連携のきっかけ・経緯 | 2015年に大学生観光まちづくりコンテスト(事務局：JTB、後援：観光庁他)へ担当科目「社会インフラ」の受講生が参加し、その時の対象地が富士川町であった。翌年より、同町のまちづくり活動支援に徳永ゼミが取り組むようになり、2017年には同町と大学が包括連携協定を結び、活動が本格化。

拓殖大学

徳永達己ゼミ 国際学部国際学科
中嶋嘉孝ゼミ 商学部経営学科

種別	私立
所在地	東京都文京区、八王子市
担当教職員	徳永 達己 国際学部 学部長／教授 中嶋 嘉孝 商学部 経営学科 准教授
活動人数	徳永ゼミ(約10人)、中嶋ゼミ(約5人)
研究テーマ	徳永ゼミ：地方創生(まちづくり)の実践を 通じて国際開発について考える 中嶋ゼミ：地域マーケティングの研究
活動内容	徳永ゼミ：インフラ開発に関する調査研 究と人材育成 中嶋ゼミ：地域課題をマーケティングの 視点から考える

日頃の活動方針、傾向

- ・インフラ開発やマーケティングに関する専門性の向上を目的として、国内における地方創生のフィールドワークを通じた実践経験を積んでいる。現在は山梨県富士川町(道の駅富士川を含む)を主な対象にまちづくり活動の支援を行っている。

道の駅との取組前の課題

- 学生が主体で行う活動は、①経費、②継続性、③効果といった課題がある。そこで、2019年より地域連携センターを設置し、富士川町との包括連携協定に基づき学生の活動を支援している。

活動方針

- 包括連携の趣意に添うもの。
 - ▶ **取組1** **取組2** **取組3**
- 学生／若者ならではの視点を生かしたもの。
 - ▶ **取組1** **取組2** **取組3**

- 大学での研究／学びを生かせるもの。
- ▶ **取組1** **取組2** **取組3**

- 一過性ではなく、継続性のあるもの。
- ▶ 取組1 取組2 取組3

成果

- ・参加学生は、教室の学びでは得られない体験を積む。
- ・道の駅では学生からの視点を反映したイベントを開催。
- ・大学は地域貢献を果たし、まさに「三方よし」の状態が得られた。

課題

- 地方創生を推進する観点から、単なる交通施設ではなく、まちづくり活動の拠点として位置付けるなど、国土交通省から適切な助言や支援を貰えると活動もより効果的になると考える。

地域 関東

内容 ●商品開発
●イベント
●調査・研究

● 連携体制・関係者

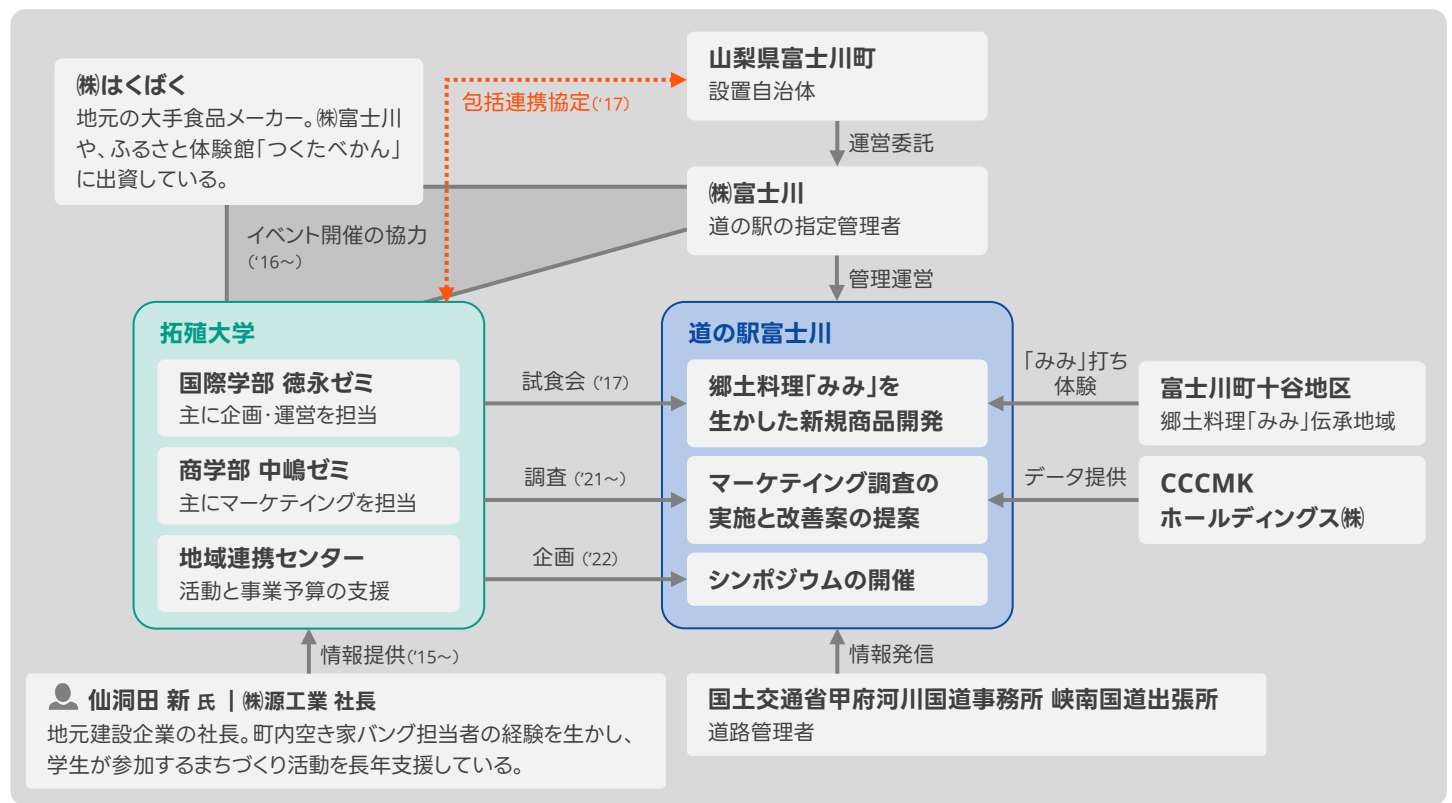


写真1 「みみ」の試食会



写真2 「みみ」の販売

● 取組の内容

取組1 2017年～	取組2 2021年～	取組3 2022年
郷土料理「みみ」を用いた 新商品の企画開発	マーケティング・リサーチ の実施	シンポジウム 「富士川ルネッサンス」の開催
●「みみ」を知る - 地域の知名度を高め地域振興を図ることを目的として、「地域ブランド創生プロジェクト」と題して、商品開発(料理)を始める。 - 富士川町十谷地区の郷土料理「みみ」に着目し、新商品を作成することを企画。 - ゼミ生が地元の集落等で「みみ」打ちを体験。 ●「みみ」の商品開発 - 調理方法を工夫して、新商品を開発する(みみストローネなど4種類)。 - 道の駅において利用者向けの試食会を開催。 ●「みみ」の普及に向けて - みみストローネは道の駅の食堂メニューとして定着。 - 学生の提案により、ふるさと納税の返礼品にも採用される。 - さらなる普及に向けて、SNSも活用し広報活動を進めていく。	●顧客を知る - 道の駅の来店客はどのような層なのか、知るためにアンケート調査を計画し、アンケートづくりの基本を学習。 - CCCMKホールディングス提供のポイント利用者の購買データ(統計データ)を使った分析を実施。 ●アンケート調査の実施 - 静岡、長野からの顧客が増加し、中部横断自動車道開通効果を確認。 - 中部横断自動車道開通1周年記念シンポジウムにて発表。 ●継続調査と道の駅の新規事業サポート - 開通効果がその後継続しているかを確かめるために毎年調査を実施。 - 新規事業であるバームクーヘン販売の課題を見つけるために顧客調査を実施。 - 更なる集客に向けた、映像放映などの販売促進策を工学部デザイン学科の学生と提案。	●シンポジウムの企画 - 富士川町と連携し、中部横断自動車道の開通1周年を記念してのシンポジウム「富士川ルネッサンス2022」を企画・準備。 - シンポジウムは道の駅で開催され、山梨県、静岡県、の県土整備担当の職員をはじめ、地域住民など多くの関係者が集まった。 ●これまでのまちづくり活動の成果発表 - 道の駅で開催されたシンポジウムの司会・進行などを学生が担当。 - 学生が町や道の駅で取り組んできた活動や検討中のアイデアを発表。 ●パネルディスカッションの開催 - 来場者した多くの関係者と意見交換を行い、共に交流を深めた。 - 町の魅力やまちづくり活動を知ってもらうため、このような発表会を定期的に開催する必要がある。

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 道の駅が持つ地域の魅力発信の場としての機能

- ・ 社会や地域の接点が限られる学生にとっては、道の駅は常に「開かれた地域の窓口」として存在している。
- ・ このように、道の駅は地域の魅力や名産、そして素晴らしい人々と知り合える「出会いと触れ合いの場」としての機能を兼ね備えており、それが道の駅の大きな魅力になっていると考える。

Point 2 ▶ 道の駅が有するまちづくり実践の場としての機能

- ・地域や社会へ、新しいことにチャレンジする人を育てる地方創生の実験の場としての機能も、道の駅の魅力だ。
- ・分かり易く表現するなら、道の駅は地域の情報や物産を発信・提供することで様々な人を呼び寄せ結びつける「磁石」であり、地方創生に向けた社会実験の場としての「砂場」である。
- ・大学としては、これからも道の駅を活動拠点として、地域の方と共に新しい機能を見出していく。

● 今後の取組・活動の展開

道の駅としては、若者層やインバウンド層に対する誘客と観光誘致が課題と考えている。そこで、SNS等を通じて学生や留学生の視点から魅力を発信できないか検討中である。

これまでは、道の駅と商品開発や販売促進、イベント開催の支援などを主に行ってきたが、今後はさらに活動の幅も広げ、ふるさと納税返礼品の開発（特に体験型コンテンツ）や観光ルートの提案など、道の駅から地域の活性化に向けた新たな事業に取り組んでいきたい。

07 商品開発から改修計画まで幅広く客観的な視点に基づき道の駅の魅力向上へ

長野大学 × 道の駅女神の里たてしな

● 取組概要

道の駅 女神の里たてしな	
所在地	長野県立科町
開駅年	2017年
設置者	立科町
運営者	農事組合法人夢科農ん喜村

道の駅・地域の課題	
・人口減少・少子化・高齢化。	
・農地荒廃・農業従事者減少・観光客の減少。	

活動方針	
・地域を活性化する方向での課題発見・解決策の明確化を学生の学習・成長につなげる。 ▶ 取組1 取組3	
・学生が自ら企画やデザインを考え、楽しみやり甲斐を感じながら取り組む。 ▶ 取組1 取組2 取組3	
・連携組織・事業者とのギブ&テイクの関係を築く。 ▶ 取組1 取組2 取組3	

成果	
・道の駅への来客者の増大 直売所・食堂の売上高増大(7年間で共に倍増した)。	
課題	
・活動交流の間が空きすぎの年度があった。年度毎に学生が入り替わるので、継続性を高める改善を図りたい。	

連携のきっかけ・経緯 | 長野大学と立科町商工会が連携協定を締結しており、連携実績が蓄積されていた。その積み重ねのなかで、商工会幹部が指定管理者(農事組合法人夢科農ん喜村)代表を務める道の駅との連携が開始された。

長野大学 熊谷ゼミ 環境ツーリズム学部 環境ツーリズム学科	
種別	公立
所在地	長野県上田市
担当教職員	熊谷 圭介 教授
活動人数	8人程度
研究テーマ	観光まちづくり・景観まちづくり・交通まちづくりの理論と実践を学ぶ
活動内容	全体ゼミ(約60名)、チームゼミ(道の駅のチーム学習)を組み合わせ活動

日頃の活動方針、傾向	
・道の駅の駅長に講師となってもらい、事業内容や経営データを学生が聴講し意見交換するとともに、道の駅の活動をサポート。	
・イベントに合わせた、商品開発やポップ・ポスター作成。ゼミチームの最大のねらいは、道の駅のバージョンアップのための計画策定や社会実験等で、計画策定の理論や実践を学ぶこと。	

活動方針	
・地域・事業課題を抽出し、その解決に取り組む。 ▶ 取組3	
・学生の学習・成長につなげる。 ▶ 取組1 取組2 取組3	
・学生が自ら企画やデザインを考え、楽しみながら取り組む。 ▶ 取組1 取組2 取組3	
・連携組織・事業者とのギブ&テイク(Win-Win)の関係を築く。 ▶ 取組1 取組2 取組3	

成果	
・道の駅の課題と可能性を客観的な視点で考察し、学生ができる範囲の魅力向上の取組を行った。特に計画策定の思想やプロセスを学んだ。	
・地域協働学習を通して、まちづくりの体制やコミュニケーション能力を養えた。	
課題	
・概ねギブ&テイクの関係が構築できていた一方で、道の駅の運営者(指定管理者)が大学やゼミに求めていること、ゼミや学生が進めたい学習や活動とのギャップがある。	

● 取組の内容

取組1 2017～23年	取組2 2018～23年	取組3 2018～19年
商品開発やイベントプログラム実施	道の駅パンフレット、商品ポップやポスター制作	道の駅改修計画策定と社会実験
● 道の駅開業イベントの実施 2017年11月の開業イベントに合わせて、学生独自企画のイベントプログラムを実施。 - 具体的には、子ども向け「たてしなクイズブース」を企画し、開催。 - 地域のマスコットの着ぐるみを着て、イベントを盛り上げる。 ● 収穫祭時のカフェ商品開発 2021～23年の収穫祭(11月23日開催)において、カフェスペースを学生が独自に運営。 - りんごを使ったスイーツや飲み物を毎年2種類ずつ開発し、提供。 - 開催前に道の駅事業者等との開発会議や試作を繰り返す。 ● 収穫祭時の交通誘導 - 道の駅の駐車場において、車両の誘導を実施。	● 道の駅パンフレット制作 - 道の駅開業にあわせてパンフレット制作・印刷。 - その後2～3年おきに新しいデザインのパンフレットを制作・印刷。 ● 商品ポップ等のデザイン - 特産のりんごをアピールするポップを制作。 - カフェのメニューのデザインを制作。 ● ポスター制作 - 道の駅のポスター制作。 - 収穫祭ポスター制作。	● オープンテラスカフェの開催 - 道の駅の上段にある農業体験施設「耕福館」前のスペースを使った屋外カフェを開催。 - 卓越した山岳景観を楽しみながらの休憩スペースとして活用。 - 当該スペースの魅力や価値を検証するためのアンケート調査を実施。 ● 道の駅改修計画を策定 - ゼミチームで道の駅の空間・施設の課題を整理し、報告書としてまとめる。 - その課題や隣接地の魅力・価値に基づき、改修・拡張計画を策定し提案。 - 模型を作成して提示。

● 連携体制・関係者

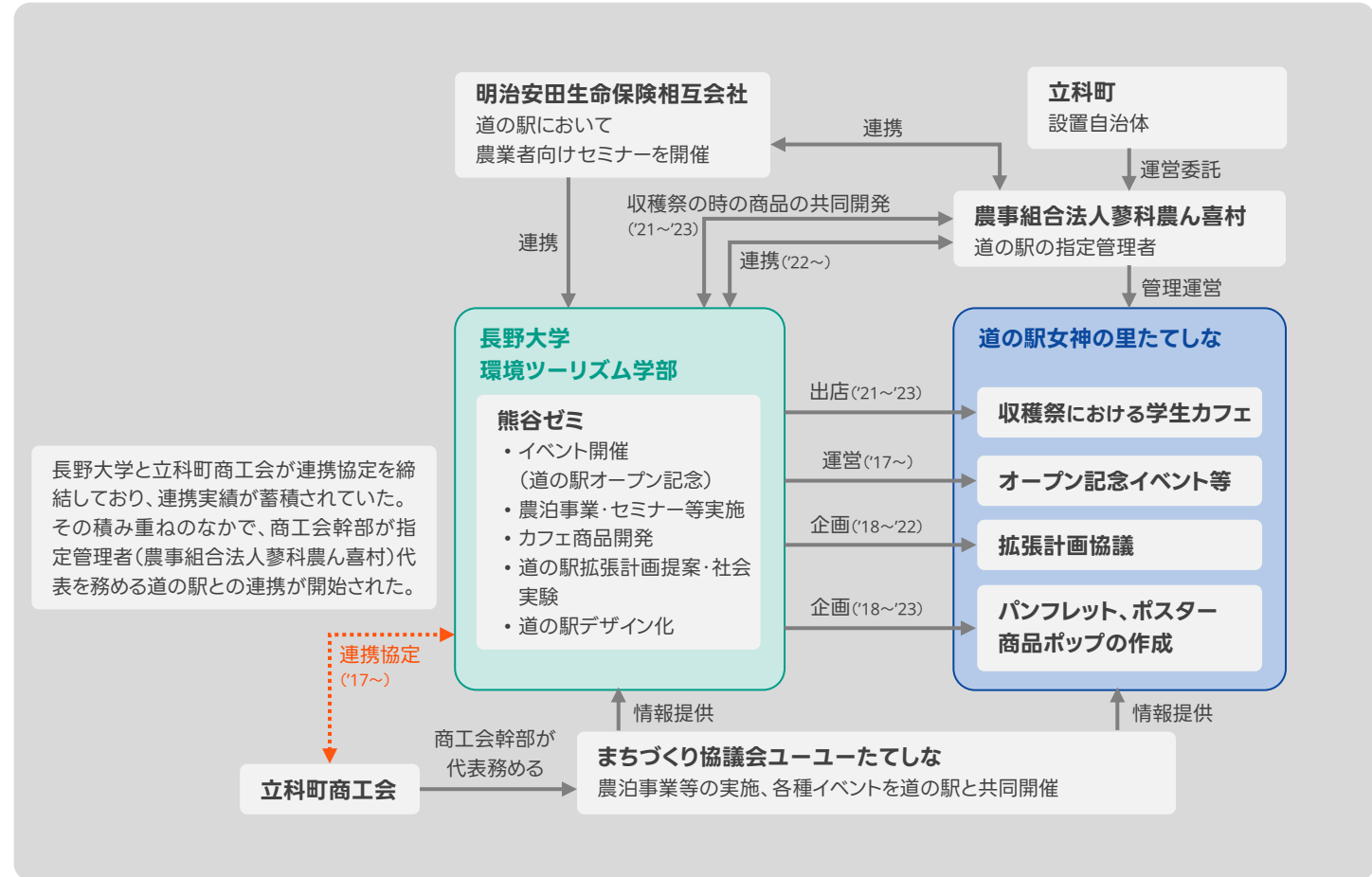


写真1 学生カフェ出店(23)



写真2 学生カフェ出店(21)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 先進事例の視察

道の駅を地域活性化の柱とするには、①地域産業との連携を如何に強化し6次産業化を図っていくか、②地域の多様な主体と連携していくかが重要と考えている。道の駅×大学連携を通して、こうした点の理解を広げ、推進していくことが重要。そのため、道の駅事業者、地域住民、行政、学生等が先進事例の視察を行った。

Point 2 ▶ 大学・道の駅双方のニーズのすり合わせによりWin-Winの関係を構築

道の駅事業者側と大学側のニーズのすり合わせ等を密に行いながら、産学連携でWin-Winの関係を構築していくことが重要と考える。道の駅の単なるお手伝いとならないように、学生の学修効果を高めていくよう、道の駅駅長に大学の意向を理解してもらった。

● 今後の取組・活動の展開

小さくても「綺麗さ快適さで全国一のトイレ」を目指すことを視野に、今後のあり方を検討中。

08 道の駅を起点とした観光振興に取り組み 新たな観光スタイルを提案する

長野大学 × 道の駅あおき

● 取組概要

道の駅 あおき 所在地 長野県青木村 開駅年 2006年 設置者 青木村 運営者 株式会社道の駅あおき	▶ 道の駅・地域の課題 - 冬期間の農産物直売所では、地物野菜が少なく集客、売り上げが減少する。 - 少子高齢化、若者の流出により、地域活力の維持や郷土文化の継承に課題がある。	▶ 活動方針 - 若い感性でのイベント企画、地域の魅力掘り起こしによる新たな客層、来訪客を獲得する。 - 取組1 取組2 取組3 取組4	▶ 成果 - 道の駅を発着点としたレンタサイクル事業にガチャやスタンプラリーを取り入れ新たな客層の獲得を図った。 - イベントの出店にあわせ地域住民と協働してベーグルやパイの商品化を提案し販売。好評を得た。その活動の中で地域住民との交流が深められた。 ▶ 課題 - 学生の限られた時間、期間の中で継続的な取組や意欲の維持に対策が必要。
--	--	--	--

連携のきっかけ・経緯 | 長野大学の教員が、青木村の観光まちづくりや景観まちづくりの学識経験者として長らく関わっており、その実績に基づき、ゼミへのオファーがあった。ゼミとしても学生主体の地域協働学習の場として、青木村に相談していた。

長野大学 熊谷ゼミ
環境ツーリズム学部
環境ツーリズム学科

種別	公立	青木村の活性化施策や、道の駅事業内容を学生が聴講し意見交換したうえで、道の駅の魅力向上と村の観光振興施策について提案、協力を実施。	・ 取組1 取組3 取組4	タイル(行先ガチャ)を提案・実施した。
所在地	長野県上田市		・ 学生の学習・成長につなげる。	・ 地域協働学習を通して、まちづくりの体制やコミュニケーション能力を養った。
担当教職員	熊谷 圭介 教授		・ 取組1 取組2 取組3 取組4	
活動人数	8人程度		・ 学生が自ら企画やデザインを考え、楽しみながら取り組む。	
研究テーマ	観光まちづくり・景観まちづくり・交通まちづくりの理論と実践	▶ 道の駅との取組前の課題 ・ 特になし。	・ 取組1 取組2 取組3 取組4	▶ 課題 ・ 連携が始動して1年あまりしかたたず、持続性が課題。学生の意欲や経験、ノウハウの継承が難しい。
活動内容	全体ゼミ(約60名)、チームゼミ(道の駅のチーム学習)を組み合わせ活動		・ 連携組織・事業者とのギブ&テイク(Win-Win)の関係を築く。 ・ 取組2 取組3 取組4	

● 取組の内容

取組1 2024年	取組2 2024年	取組3 2024年	取組4 2024年
道の駅を起点とした観光振興プログラム あおきのココ行こう！ガチャ	商品開発とイベントへの出店	道の駅における恋渡神社里宮の整備計画提案	道の駅あおき ビジュアルアイデンティティ制作
● 道の駅を起点としたスタンプラリーのプランニング - 青木村の観光対象を予め選定したうえでそれをめぐるいくつかのコースを設定し、ガチャガチャでコースを決めるよう仕組みを考案。 - コースをめぐるスタンプラリー形式とし、その台紙制作やスタンプ作成を実施。 ● 道の駅を起点としたスタンプラリーの実施 - 学生を対象にしたモニターツアーを実施。 - モニターツアーを踏まえた本ツアー(スタンプラリー)を開催。	● ブルーベリーベークル・ハートパイの商品開発 - 地域の特産品調査のもと、地域の農家の協力の下、収穫体験。 - いくつかのレシピを考案し、試作・評価(地域のパン工房の協力の下、生地こね機や発酵機なども使用させていただく等地域コミュニティ、事業者と連携)。 - 本商品を決定し、制作。 ● 産業祭における出店・販売 - 道の駅あふるさと公園を会場にして開催された産業祭にブース出店し、販売。 - ベークル63個、ハートパイ60個共に完売。	● 恋渡神社の歴史文化の顕彰 - フィールドワークの実施。神社の歴史や文化、関連する故事等を収集・整理。 - 青木村担当課の幹部等とその活用について協議。 ● 道の駅における恋渡神社里宮の整備計画策定・提案 - ハート形をした花手水、想いの声が届く電話、恋みくじ×名言ドリンク等のアイデアを提案。 - 計画書としてまとめる。 - 青木村の幹部にプレゼンテーション。	● 道の駅のVI上の課題、デザインモチーフの検索 - 道の駅のビジュアルアイデンティティ上の現状と課題を分析。 - ビジュアルアイデンティティに使えるデザイン要素を検索し、サーベイ。 ● 道の駅ロゴマークの制作 - デザイン要素を用いたロゴマークを2案制作・提案。 - ロゴマークを施設外観、パッケージに用いたイメージを明確に伝えるモックアップ(モニター制作)。 - 道の駅を中心とした観光ポスター制作。

● 連携体制・関係者

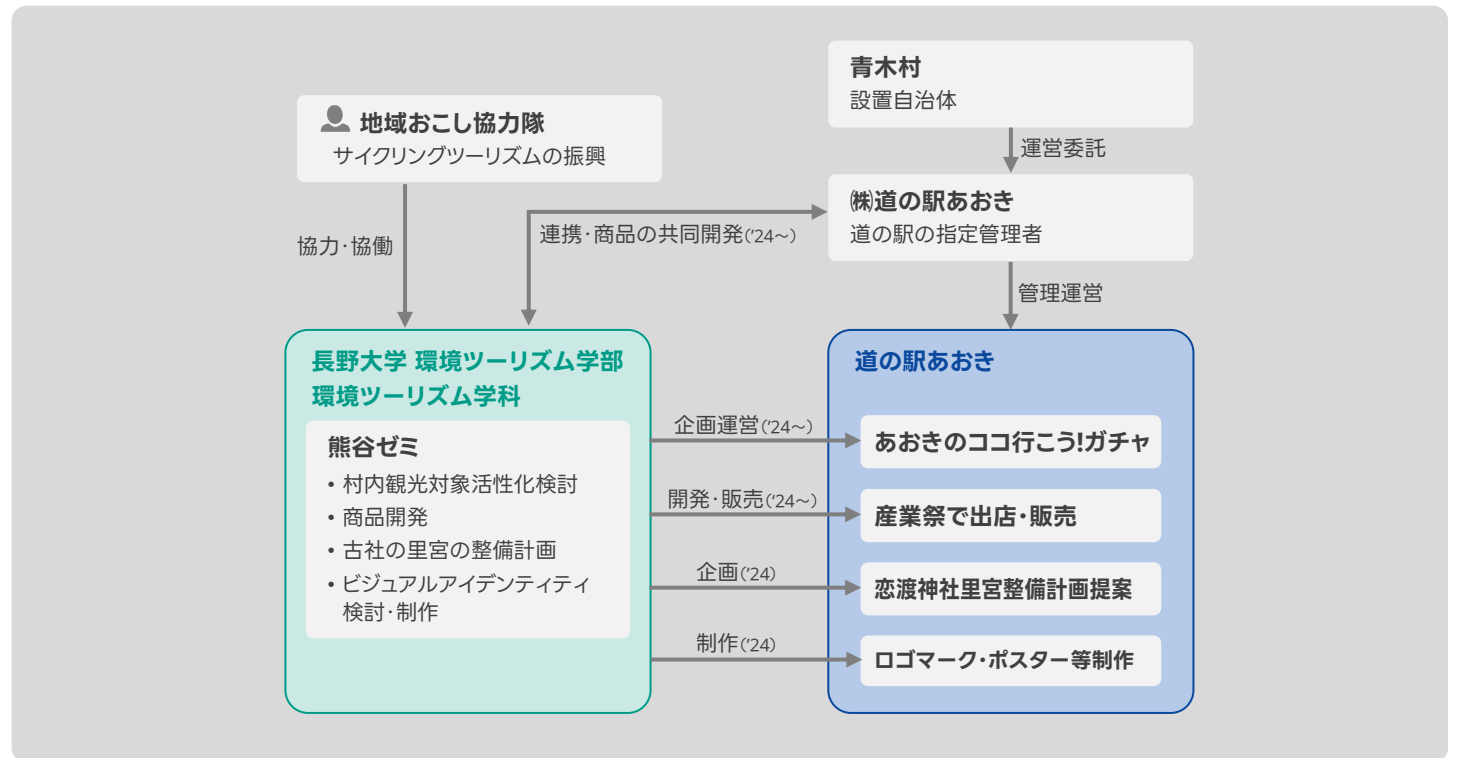


写真1 青木村行先ガチャとスタンプラリー



写真2 青木村産業祭出店

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 地域活性化の柱としての道の駅

《大学の視点》道の駅は地域活性化の柱になるものであり、そのためには①地域産業との連携を如何に強化し、6次産業化を図っていくか、②地域の多様な主体と連携していくかが重要と考えている。道の駅×大学連携を通して、こうした点の理解を広げ、推進していくことが重要。

Point 2 ▶ 役場を中心とした調整による“Win-Win”の関係

《大学の視点》本連携においては、村長の熱意や意欲的な姿が、連携にあたっての原動力となった。また担当課長を中心に道の駅事業者側と大学側のニーズのすり合わせ等を密に行いながら、産官学連携で“Win-Win”の関係を構築していったことが、円滑な連携につながった。特に予算面で、村の積極的な姿勢や協力は不可欠だった。

Point 3 ▶ 学生の立場を理解し、支える

《道の駅の視点》学生の立場を理解し、失敗や成功体験の機会を提供したい。地域探求のなかで地域住民、歴史、文化に触れ、当地域への移住、定住のきっかけになると良い。学生は真面目で一生懸命であるため、道の駅、村役場、地域住民が支える仕組みが重要である。

● 今後の取組・活動の展開

《道の駅の視点》道の駅が学生のフィールドワークの場として取り組むことは、にぎわいや活力が生まれる。大学と道の駅がお互いにプラスになることが多く、課題を共有しながら学生にも経験の機会を提供したい。

09 道の駅と近隣施設で横断的に活動し 一体的なにぎわい創出を目指す

金沢星稜大学 × 道の駅めぐみ白山
はくさん

● 取組概要

道の駅 めぐみ白山	道の駅・地域の課題	活動方針	成果
所在地 石川県白山市 開駅年 2018年 設置者 白山市 運営者 株式会社めぐみ白山	・近隣施設「トレインパーク白山」への立ち寄り客の取り込み。	・今年度「トレインパーク白山」に展示される「ドクターイエロー」の集客効果により来店客数の更なる拡大を図る。 ・取組2 取組3	・令和6年度の来客数は前年比106%に増加。 ・課題 ・当施設独自の魅力を継続的に発信し、来客数拡大と、買い上げ率UPに反映させること。

連携のきっかけ・経緯 | 石川県白山市と金沢星稜大学とは2016年度に包括連携協定を締結し、それに基づく活動を進めることとなったが、2018年に白山市がSDGs未来都市に認定され、同年「道の駅めぐみ白山」がオープンしたタイミングで、金沢星稜大学からめぐみ白山をSDGs未来都市白山の情報発信拠点と位置付けたプロモート活動を提案し、その方向で進めることになった。

金沢星稜大学 新ゼミ 経済学部

種別	私立
所在地	石川県金沢市
担当教職員	新 広昭 副学長／教授
活動人数	8人
研究テーマ	SDGs × 地域創生 × ESG
活動内容	地域創生に結びつくフィールド活動

日頃の活動方針、傾向

- ・学生の以下の育成を目的。
 - SDGs、地域創生に関する知識の習得。
 - 現地調査やデータ分析に基づいた地域課題の発見。
 - 課題解決の仮説立案。
- ・仮説の検証に向け、地域の行政、団体、企業と連携してフィールド活動を実施。
- ・フィールド活動(仮説検証)の結果を政策提案として情報発信。

道の駅との取組前の課題

- ・活動を始めた2016年度当時はSDGsの考え方が一般的には普及しておらず、活動テーマに沿ったフィールド活動が可能なカウンターパートが見当たらなかった。

活動方針

- ・(地域課題の発見)事前調査や関係者との協議を通じて、道の駅と「トレインパーク白山」との一体的にぎわい創出のための課題を抽出。・[取組3](#)
- ・(仮説立案)仮説を立て、検証のため「トレインパーク白山」来訪者アンケート調査、交通状況調査を企画。・[取組2](#)
- ・(仮説の検証)地域の行政、団体、企業と連携してフィールド活動を実施。アンケート・交通状況調査の実施、道の駅「めぐみ白山」の販売商品をSDGs商品として紹介するPOPパネル作成、両施設の紹介動画の作成、YouTubeで広報。・[取組1](#) [取組2](#) [取組3](#)
- ・フィールド活動(仮説検証)の結果を政策提案として情報発信。両施設にPOPパネルを掲示(紹介動画のQRコードも刷り込み)、紹介動画を道の駅「めぐみ白山」のディスプレイで放映。・[取組1](#) [取組3](#)

成果

- ・アンケート・交通状況調査で貴重なデータが得られ、学生にとっても一連のプロセスを学ぶ機会となった。
 - ・SDGs商品紹介POPパネル作成は両施設の来訪者の増加に寄与。学生がSDGsを考える機会となった。
 - ・両施設の紹介動画は白山市初の空撮動画となった。学生にとっても動画作成のスキルアップの機会となった。
- 課題
- ・ゼミ生に道の駅との連携取組の意味を理解させることに時間を要した。
 - ・Web等を活用し、講師の方がレクチャーしてもらえるような仕組み(制度)が欲しい。

● 取組の内容

取組1 2019年～	取組2 2024年	取組3 2024年
地元特産品のSDGs商品としての情報発信	来場者アンケート及び来場者交通情報調査	両施設の紹介動画作成
● 目的 ・道の駅「めぐみ白山」で販売している地元産品をSDGs商品としてアピール。 ● 内容 ・地元産品から5点をピックアップし、製造者、原材料、製造方法等を調べ、SDGsの観点から分析・紐付け。 ・商品を紹介するPOPを個別に作成したうえで、パネルにまとめる。 ・作成したパネルを道の駅「めぐみ白山」と「トレインパーク白山」内にて掲示。 ● POPパネルの効果の検証 ・次年度は道の駅の来訪者にアンケート調査を行い、POPパネルの効果を検証したい。	● トレインパーク白山来場者アンケート ・来場者の属性、「トレインパーク白山」への来場手段、「トレインパーク白山」へのアクセス、道の駅「めぐみ白山」への来訪経路・予定等について把握・分析。 ● 来場者交通情報調査 ・両施設の駐車場に両施設とも訪れている車の台数及びどこから来訪しているかについて把握・分析。	● 紹介動画の作成 ・ドローンを活用した空撮を盛り込んだ両施設の紹介動画を作成。 ・動画は、道の駅のディスプレイで流すとともに、インターネット上に公開。 ・動画の二次元コードを商品紹介POPパネルにも掲載。

地域	北陸
内容	● 広報 ● 調査・研究

● 連携体制・関係者

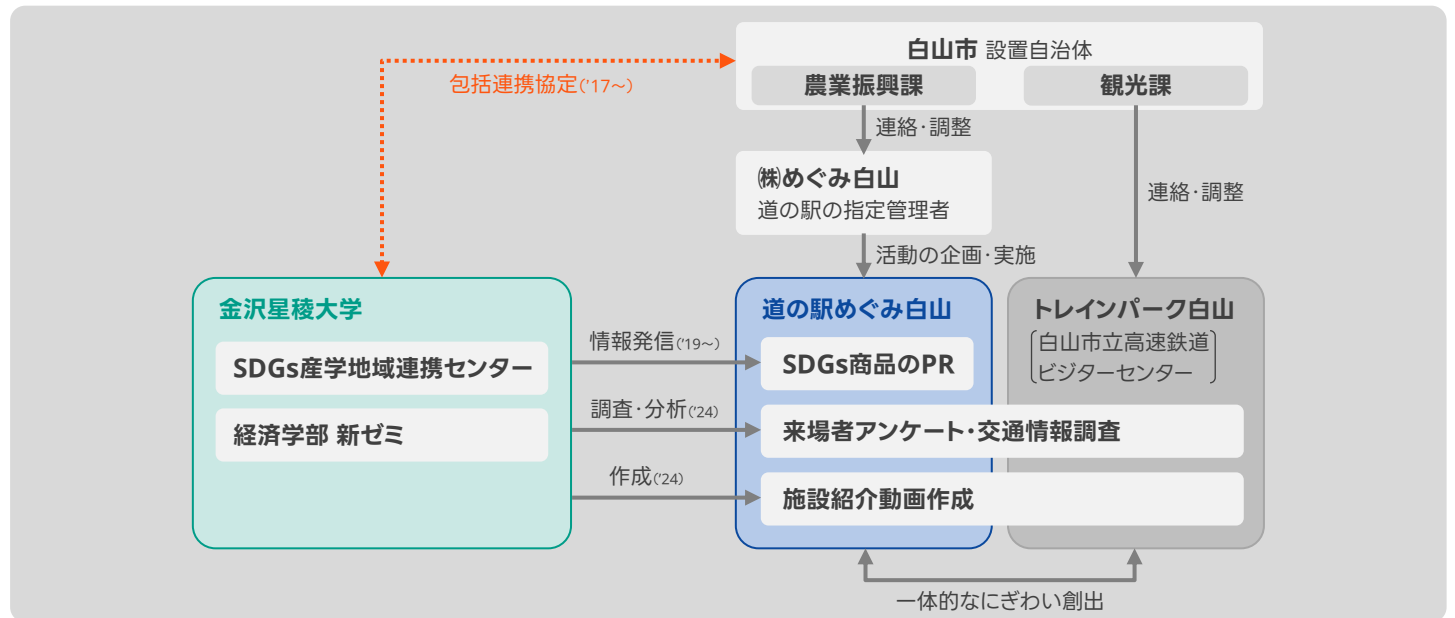


写真1 SDGs商品調査の様子(24)



写真2 道の駅めぐみ白山SDGs商品ポップパネル(24)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 大学側と道の駅側の目的意識のすり合わせ

大学側(教員、学生)と道の駅側(道の駅運営主体、自治体等)の双方の目的意識のすり合わせ、相互尊重が極めて重要であるとする。教員はディプロマポリシーに沿う教育目的達成を、学生は「ガクチカ」(就職活動で学生が企業から受ける質問「学生時代に力を入れたこと」の略)になることを意識している。道の駅側は売上向上や魅力度向上等を意識することが考えられる。その点を事前に十分協議してWin-Winの関係性を構築しておく必要がある。

Point 2 ▶ 活動報告の場所の確保

活動報告の場を確保することが学生のインセンティブ確保のためにも必要である。その意味で、今回の連携事例発表会(国土交通省主催、2025年3月実施)のような場が存在することは重要であり、今後とも継続してもらえるとありがたい。その際、コンテストのような取組の優劣を競うような場にするのではなく、今回のような切磋琢磨のための情報交換の場であってほしいと思う。

● 今後の取組・活動の展開

2023年5月に白山市全域を対象とする白山手取川ジオパークがユネスコ世界ジオパークに認定され、白山市はジオパークへの誘客を積極的に図ろうとしている。今後の展開として、道の駅「めぐみ白山」をゲートウェイとして来訪者をジオパークへ誘導する取組を進めていきたい。

10 学生有志、道の駅、地元農家による 活発な活動が生み出す地元密着商品

愛知大学 × 道の駅とよはし

● 取組概要

道の駅 とよはし	道の駅・地域の課題	活動方針	成果
所在地 愛知県豊橋市 開駅年 2019年 設置者 豊橋市 運営者 株式会社道の駅とよはし	産学官連携の場が少なく、地域の若者へのキャリア支援を実施する機会が少ないことが課題。	- 商品開発を実施してもらうためにそもそもの基礎知識を高めるカリキュラムを計画。 ▶ 取組1 - マーケティング／原価計算コストのスペシャリストを招聘して知識を高める講座を実施。 ▶ 取組1 - クリエイティブ(アートディレクター等)とのオリエンテーションを実施。 ▶ 取組1 - 新商品を活用して、道の駅「とよはし」での実演販売を実施。 ▶ 取組1	地元の学生に商品開発を行う機会を提供し、学生のキャリア構築に役立てる。
		課題	
		学生がやりたいことと、マーケットにあう商品に対する認識の調整。	

連携のきっかけ・経緯 | 商品開発をしてみたいという学生の声が大学内に多数あり、当時開業間もなかった地元施設である道の駅「とよはし」に大学側から活動を相談した。

愛知大学 地域連携室

種別	私立
所在地	愛知県豊橋市
担当教職員	中野 憲一 地域連携推進事務局 職員
活動人数	各活動単位で10人前後 (公募による参加)
活動内容	連携・協力協定締結先 自治体・企業からの依頼・相談に基づく学生主体の活動

日頃の活動方針、傾向

- 互恵性を土台とし、商品開発を進める中で学生が主体的に行動できるようになること。
- 東三河地域への愛着醸成を育むことを意識しながら活動している。

道の駅との取組前の課題

- 特定(連携・協力協定締結先)の自治体や企業との連携が多く、政策提案やグループワークまでに留まる内容であった。

活動方針

- 商品開発を通じて学生の東三河地域への愛着醸成を育み、人口流出が進む当該地域への就職意識を促す。
 - ▶ [取組1](#)
- 学部を超えた参加者が意見を出し合い、新たな知見を得る。
 - ▶ [取組1](#)
- 単にアイデア出しで終わるのではなく、マーケティングやプロダクト制作に対するアプローチの手法を専門家から学び、売れることにコミットした商品づくりを実践。
 - ▶ [取組1](#)

成果

- 商品開発を通じて東三河地域への愛着が増したほか、学生の考えや想いを形に残すことができた。

課題

- 学生公募型の活動であるが故、日程調整や学生間のコミュニケーションに苦労した。

地域 **中部**
内容 ● 商品開発

● 連携体制・関係者

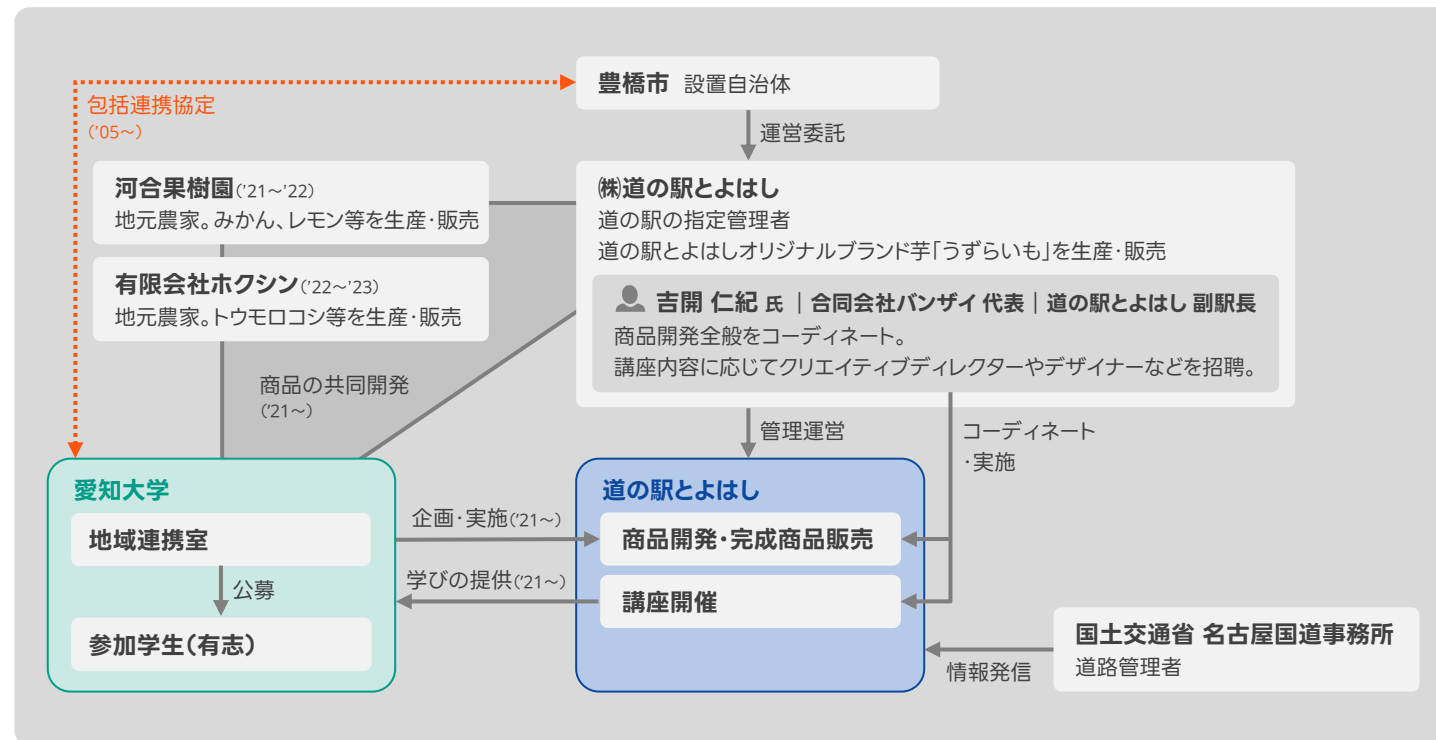


写真1 商品開発のパッケージデザインを検討している様子(24)



写真2 商品販売会に出店した様子(25)

● 取組の内容

取組1 | 2021年～継続中

東三河の食材を使用した商品開発

● 企画

- ①商品開発に必要な知識を身に着ける → 道の駅「とよはし」やクリエイティブディレクターから、商品開発に必要な知識を得る。
- ②各自商品のコンセプトを考え、提案する → 身に着けた知識をもとに、各自商品のコンセプトを考え、提案。
- ③チーム作り → コンセプトの方向性が似ている学生でチームを組み、コンペティションに向けて話し合い。

● 準備・製作

- ①味の調整 → コンペティションで採用されたコンセプトに合わせ、試食をしながら味を調整。
- ②パッケージデザインと包装紙の作成 → デザイナーと話し合いを重ね、コンセプトにあったデザインを検討。
- ③アレンジレシピの考案 → 商品の活用例を増やすため、アレンジレシピを考案。

● 発売

- ①商品発表会 → 商品開発の過程の様子や商品に対する思いを発表。
- ②販売 → 開発商品専用のブースを設置、多くのお客様に宣伝・販売。

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 学生のモチベーション向上

商品開発に1年以上を費やす長期の活動で、参加学生のモチベーション維持が課題であった。初回講座時にスケジュール感や商品を販売するというゴールを伝えた他、新入生向けオリエンテーション等で先輩学生から内容を紹介するなど工夫した。

Point 2 ▶ ファシリテーションによる活発な雰囲気醸成

ゼミではなく正課授業外(公募)の活動であるため授業のような強制力は無いが、参加学生は皆意識が高い。その一方、学生間が初対面であるため緊張感をほぐす必要があった。商品開発は意見出しが全てであり、道の駅「とよはし」副駅長がファシリテートしながら楽しい雰囲気を醸成することに努めた。

● 今後の取組・活動の展開

- 今後も商品開発を継続し地域貢献の一助となるよう努める他、参加した学生が卒業後も東三河地域へ就職・定住することを期待している。
- 愛知大学との取組で年々開発した商品数が増加している。今後は学生との共同開発コーナーの売り場を道の駅内に広く設置したい。

11 地域との積極的な関わりが生む信頼と成果 地域ブランディング強化に向けた取組

立命館大学 × 道の駅志原海岸

し はらかいがん

地域 近畿

内容 イベント

● 取組概要

道の駅 志原海岸 (海来館)
所在地 和歌山県白浜町
開駅年 1995年
設置者 白浜町
運営者 日置川町商工会

道の駅
・**地域の課題**

- ・ 少子高齢化による人口減少、交通量の減少等。

活動方針

- ・ 地域の魅力向上のための情報発信(フォトコンテストの実施等)。
- ・ **取組1**

成果

- ・ 日置川地域への来訪を通じた学生の思い出作り、将来の再来訪への期待感の醸成。

課題

- ・ 限られた人員・期間・予算の中で、目に見える成果が得づらいため、様々な取組を重ね合わせながら、今後も地道な取組が必要。

連携のきっかけ・経緯 | 元々、道の駅の所在する白浜町の観光施設と学校法人立命館との連携があり、その一環として白浜町とも何かできないか、という話が法人内の別部署からあった。白浜町の中心部においては観光が主で課題が少ないが、中心部から外れた地域における課題を想定して、連携を依頼した。

立命館大学 小沢道紀ゼミ 食マネジメント学部 食マネジメント学科

種別	私立
所在地	滋賀県草津市
担当教職員	小沢 道紀 教授
活動人数	19人
研究テーマ	マーケティング、地域活性化等
活動内容	食に関する学外組織と連携した社会課題解決プロジェクトの展開。 ゼミ学生がプロジェクトごとにわかれ、多様な取組を実施。

日頃の活動方針、傾向

- ・ 道の駅の課題を踏まえて、学生による課題解決提案を実施し、協働により課題解決を実施。

道の駅との取組前の課題

- ・ 学生活動を支える協力体制の構築、活動実施に当たった資金面の担保は、常時課題を抱えている。
- ・ 大学単位の連携ではなく、研究室単位での連携となる傾向がある。

活動方針(全体方針)

- ・ 学生の活動は行動を伴って具体的に実現し、成果を測定。
- ・ 片方に過度な負担が偏ることなく、双方が納得して実行すること。
- ・ 双方が利を得られるようなWin-Winの関係の構築。

活動方針(道の駅志原海岸との取組)

- ・ 道の駅の集客増のため、双方が納得の上、実現可能な取り組みとする。
- ・ **取組1**
- ・ 学生が自ら積極的に取り組みたい活動内容を実施。
- ・ **取組1**

成果

- ・ 地域の多様な関係者とも連携して、提案→企画→実施というサイクルを回して結果が出せ、それ自体が学生の学びと成長に結びついた。

課題

- ・ 対象地域は公共交通機関が整っておらず、移動に時間がかかるため、日常的なコミュニケーションが取りにくい。
- ・ 訪問時には、1泊2日の日程が必要となることも多く、2カ月前からスケジュール調整を行った一方、天候不順などで訪問できないことも生じた。

● 取組の内容

取組1 | 2024～25年

道の駅の利用者増に向けた「日置川アドベンチャーフォトコンテスト」の実施

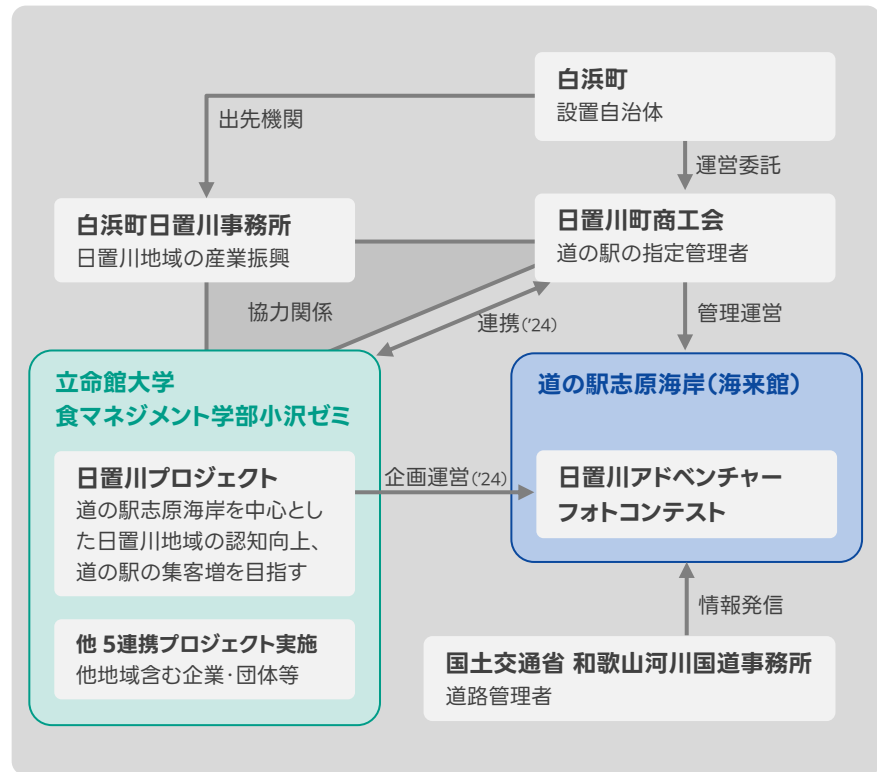
● 概要

- ・ 目的：道の駅「志原海岸」の集客および認知度の増加。
- ・ 概要：道の駅「志原海岸」のある日置川地域は、「鮎とテニスのまち」として地域振興の実施。
 - 学生自身が見た時に、「自然の美しさ」と多様さ」というコンセプトが地域を表すと認識。
 - 道の駅運営主体の日置川商工会へ課題解決の案を提示し、協議の上でフォトコンテストのテーマ(自然と冒険のまち「日置川」)を決定。
- ・ 成果：応募者数77人(件数252作品)を県内外から集め、集客および認知を一定高めた。

● 経緯

- ・ 24年6月初旬 訪問：日置川地域の観光資源を巡り、地域の特徴を分析。商工会の方と地域の課題についてディスカッション。自然と関わる色々な地域資源はあるが、資源をうまく表現しきれていないことを認識。
- ・ 6月中～下旬 企画案の立案：課題を基に企画案(①街歩きイベントの開催、②フォトコンテストの開催、③ラーメンなど、道の駅食堂での商品開発)を検討し、②フォトコンテストの開催に決定。
- ・ 7～8月 クラウドファンディングの実施：運営資金の調達のためクラウドファンディングを実施し、17万円を調達。
- ・ 8月 ゆるキャラの作成：リターン品などでグッズ展開。企画の発信塔として活用。
- ・ 9月 フォトコンテスト作品の募集開始。
- ・ 10～11月 応募数増加に向けた活動：SNSでの広報、日置川地域の事業者の訪問、日置川地域のお祭りへの参加、道の駅での募集イベントの開催など。
- ・ 12月 審査会の開催：応募作品の審査、表彰作品を選定。
- ・ 25年1月 表彰式の開催：道の駅の近隣施設での表彰式の実施。

● 連携体制・関係者



日置川アドベンチャーフォトコンテスト
募集テーマ「自然と冒険のまち 日置川」
「和歌山県白浜町日置川地域」で撮影された、
「雄大な自然を感じる写真」、「冒険心くすぐられるような写真」を募集します。
募集期間：2024.9.14(土)→11.30(土)

フォトコンテスト募集チラシ(24)



写真1 地域の祭りを手伝う(24)



写真2 メンバーの集合写真(24)



作成したロゴ・ゆるキャラ(24)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 学生自身が地域と積極的に関わっていくこと

道の駅は多くは立地する地域の運営主体が運営している。道の駅「志原海岸」は、地域の商工会が運営しており、単に道の駅だけを視野に入れるのではなく、地域の多様な関係者との関わりや、関係者による活動の理解が重要となる。実際に学生が半年で8回以上足を運び、地域の方とコミュニケーションを多くとった結果、「いつも日置川のためにありがとう」などの言葉をもらうようになった。

Point 2 ▶ 日常的に関われない距離だからこそ、できることは全てやる

地域をテーマとしたコンテストであるにも関わらず、学生が日常的に関わることはできない。そのため、大学内でできるようなオンラインでの広報と、その状況を踏まえた実際の訪問を組み合わせることによって、コンテストを実施した。実際に、学生自身がゆるキャラ、ホームページ、チラシやポスターなども作成し、タイミングを見て地域に依頼しつつ、活動を行った。

● 今後の取組・活動の展開

現在のところ、道の駅のリソースの課題もあり、新たな取組の協議には至っていない。フォトコンテスト自体は、継続するために、学生の経験を踏まえた実施要項を作成し、地域主体で実施する枠組みを模索中である。大学外の多様な組織との連携については、活動方針に基づいて、複数のところとプロジェクト型で連携予定。

12 複数の道の駅で調査・実証事業を実施し 6次産業化のネットワークを形成

広島経済大学×道の駅みはら神明の里 道の駅西条のん太の酒蔵 道の駅来夢とごうち

● 取組概要

道の駅

みはら神明の里

所在地 広島県三原市
開駅年 2012年
設置者 三原市
運営者 株式会社道の駅みはら

道の駅

西条のん太の酒蔵

所在地 広島県東広島市
開駅年 2022年
設置者 東広島市
運営者 株式会社第一ビルサービス

道の駅

来夢とごうち

所在地 広島県安芸太田町
開駅年 1995年
設置者 安芸太田町
運営者 一般社団法人
地域商社あきおた

地域 中国

内容 ●商品開発
●広報
●調査・研究

道の駅

・地域の課題

- ・農家の高齢化やそれに伴う会員脱退(みはら)
- ・買い物弱者に対するサービスとその継続(みはら)
- ・人件費など管理費全体のコスト増(みはら)
- ・地元食材を活用した売れる特産品の開発(とごうち)

活動方針

- ・時流にあった方向から仕掛けて新規顧客を創造する。(みはら)
 - ・ [取組2](#)
- ・時流に合った地域の農業商品を使った素材で駅ならではの商品を作る。(みはら)
 - ・ [取組2](#)
- ・市内の買い物弱者へ向けたサービスの維持、継続の難しさの現実を勉強する。(みはら)
 - ・ [取組2](#)
- ・上記で現実を勉強したうえで、新たなサービスや新しいオペレーションを創造する。(みはら)
 - ・ [取組2](#)
- ・地域の農産物と地域の事業者のコラボを通じて、駅ならではの商品を作る。(とごうち)
 - ・ [取組2](#)

成果

- ・現場スタッフのスキルアップ。移動販売業参入では、利用者(高齢者や要介護者)への対応や道の駅が抱える商品以外のニーズの掘り起こしと対応。新しい取組では、ゼロからつくりあげる創造力や実現力。(みはら)
 - ・道の駅の新しい取組や側面のアピール。(みはら)
 - ・地域の食材を活用したクラフトビールの開発につながった。(とごうち)
- 課題
- ・プロジェクト実行に費用とパワーが必要。補助金を活用しているが、作戦会議からプロジェクト当日の実働時間、人件費などは賄えない。商業ベースに落とし込んで実行させ成果が上がるまで時間がかかり(2~3年)、小規模事業者には資金力、忍耐力、継続力など相当なパワーが必要。一方で、やった「証」と「誇り」は残るため、学生のために協力していきたい。(みはら)
 - ・商品開発自体が目的ではなく、商品が売れることにより地域の経済が潤うことが目的となるべきであるが、販売戦略の策定、「売れる商品」の創出までは至らず、補助事業期間以降の継続的な連携はできていない。今後は継続的に販売できる環境づくりを含めた取組が必要である。(とごうち)
 - ・商品開発自体だけでなく、本来の目的にも焦点を当てたメディアでの取り上げ方が求められる。(とごうち)

連携のきっかけ・経緯 | 学生がゼミ内のグループ演習を行う中で、実際に自ら地域活動に関わってみたいという要望があったため。

広島経済大学 藤原ゼミ
経営学部 経営学科

種別 私立
所在地 広島県広島市
担当教職員 藤原 久嗣 教授
活動人数 約15人
研究テーマ 観光経営・地域経営
活動内容 ゼミでの演習、フィールドワーク

日頃の活動方針、傾向

- ・地域に関わる課題について、講義での経営学の学びを実践の場で自ら体験し、地域社会に関心をもち関わっていく。
- 道の駅との取組前の課題
- ・学生の交通費等の予算措置、地域関係者との調整、交通手段の検討など

活動方針

- ・チームが互いに協力し合い目標を達成する。
 - ・ [取組1](#) [取組2](#)
- ・世の中の出来事に関心をもち、自身で考え抜くチカラを身につける。
 - ・ [取組1](#) [取組2](#)

成果

- ・机上だけでなく現場に行き自ら体感することの重要性を学ぶことができた。
- 課題
- ・現場での取組を行うためには、取組に関わる時間の確保が必要であるが、講義期間中での時間の確保が難しく、春夏の限定された期間に集中してしまう点。

● 取組の内容

取組1 | 2022年

道の駅みはら神明の里 道の駅西条のん太の酒蔵 道の駅来夢とごうち

地域におけるにぎわいの創出

● 道の駅の仕事内容や課題を知る

- ・店舗実習(3駅)、移動販売の体験(みはら神明の里)、調査会社との合同調査(来夢とごうち)、新規オープン時の店舗実習(西条のん太の酒蔵)を実施。
- ・道の駅責任者へのインタビュー、道の駅利用者へのアンケート調査を実施。

● 調査結果をもとにした実証事業の企画立案

- ・地元食材の試食会を開催。
- ・子供向けイベント(スーパーボールすくい、野菜釣り)の開催。

● 成果発表

- ・県内道の駅責任者や県内首長が集まる会合の場で成果発表を実施。

取組2 | 2023年~継続中

道の駅来夢とごうち

観光資源の共同開発・PR
~道の駅を中心とした6次産業化の推進

● 地域の特産物を知る

- ・地域訪問し、行政機関や農家とのディスカッションを実施。
- ・学生による収穫実習。

● クラフトビール、お茶製品の商品開発

- ・地元食材を活用したクラフトビール、お茶製品の開発。
- ・クラフトビールの製造実習。

● 販売先の開拓および販売実習

- ・道の駅での販売実習、製品に関するアンケート調査。
- ・チラシ、パンフレット製作などの販売促進活動、メディア掲載など。

● 連携体制・関係者

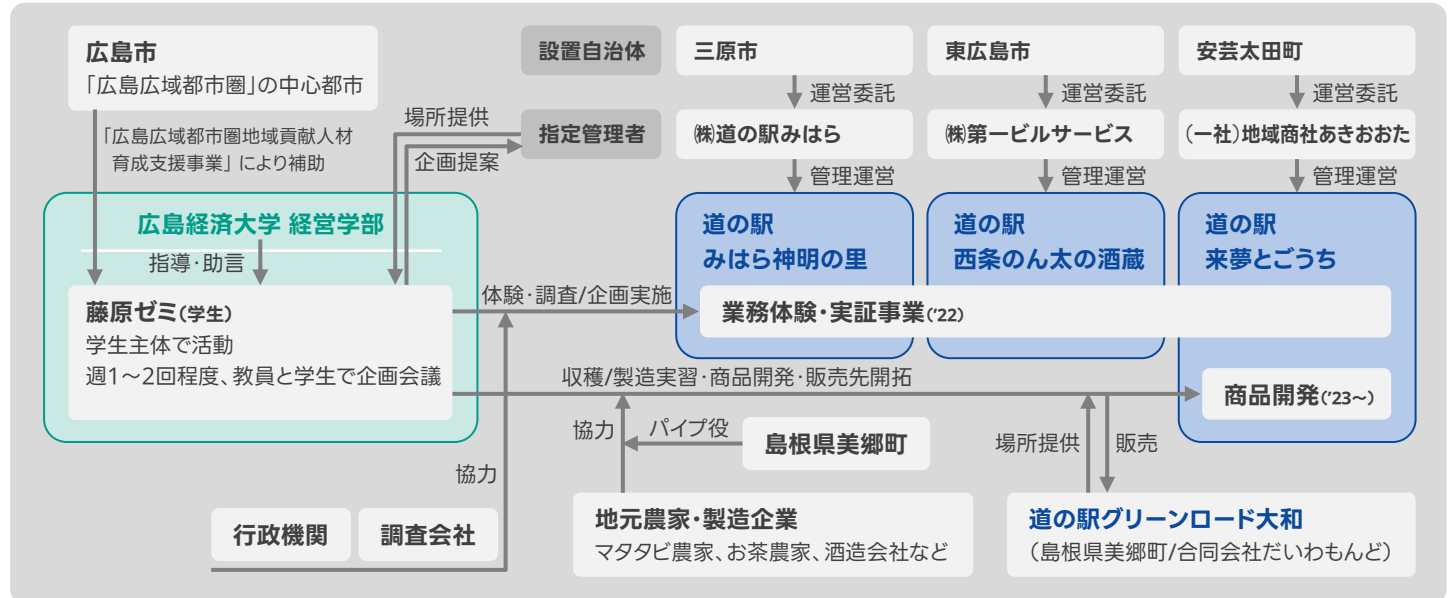


写真1 道の駅のイベントに出店した様子(23)



写真2 島根県美郷町の地元食材(マタビ)の収穫実習風景(23)



写真3 地元お茶農家から講話を受ける様子(23)



写真4 島根県美郷町長へインタビューした様子(23)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 様々な関係者・地元事業者の協力を得る

学生が道の駅の活動を行うにあたっては、道の駅関係者だけでなく、国土交通省・地域の行政機関・農家・事業者など様々な方の協力が必要であり、今後の地域を担う学生の育成にはこうした方々の協力が重要な要素となる。

Point 2 ▶ 適切な予算措置の必要性

継続的な取組を行っていく上では、まずは活動を行う為の予算措置が必要。

● 今後の取組・活動の展開

学生の意向を尊重しつつ、引き続き、道の駅を軸にした取組を行っていく予定

13 授業の枠組みで多様な関係者と連携し 企画の実現につなげる

香川大学 × 道の駅とよはま 道の駅大坂城残石記念公園

おおさかしょう さんせきぎねんこうえん

地域 四国
内容 商品開発

● 取組概要

道の駅 とよはま 所在地 香川県観音寺市 開駅年 1999年 設置者 観音寺市 運営者 銭形マルシェ合同会社	道の駅・地域の課題 ・ 少子高齢化による人口減少、若年層の人口流出に伴い、観音寺市の早急な活性化が課題。	活動方針 ・ 道の駅ならではの産学官連携による企画の打ち出し。▶ 取組1 ・ 瀬戸内海の海の幸を利用したオリジナルメニュー開発。▶ 取組1 ・ 香川県の東部と西部の特産物を融合した商品開発。▶ 取組1	成果 ・ メディアを使用した広報活動が活発になり、駅と大学との連携活動の認知度が向上。 課題 ・ 継続性が乏しく、良い企画が次につながらるのが難しい場合がある。
道の駅 大坂城残石記念公園 所在地 香川県土庄町 開駅年 1999年 設置者 土庄町 運営者 土庄町	道の駅・地域の課題 ・ 小豆島北部地域唯一の道の駅だが、人を呼び込めていない。	活動方針 ・ 地域の特色を生かした土産を開発し、新たな来訪客を獲得。▶ 取組2	成果 ・ 地域の観光資源である「石」をテーマにしつつ、若者世代も手に取りやすく、ディスプレイに工夫のあるデザインの商品を開発した。 課題 ・ 商品の完成までに1年半を要し、打合せの間隔が空いた。

連携のきっかけ・経緯 | 連携している自治体からのマッチングで道の駅との連携を開始

香川大学 地域人材共創センター 種別 国立 所在地 香川県高松市 担当教職員 神田 亮 講師 活動人数 10人程度 研究テーマ 瀬戸内地域活性化プロジェクト(地域理解型科目) 活動内容 自治体等と連携し、地域理解や地域課題解決に向けた教育プログラムを実施	日頃の活動方針、傾向 ・ 地域の活性化、道の駅のにぎわいづくり。 道の駅との取組前の課題 ・ 特になし。	活動方針 ・ 道の駅が立地している地域を理解し、その地域の特色に合わせた取組を実施。▶ 取組1 取組2	成果 ・ 道の駅「とよはま」「大坂城残石記念公園」ともにその地域の特色に沿った商品開発ができた。 課題 ・ 取り組む学生の継続性と、商品開発後の検証が課題。
--	---	---	---

● 取組の内容

取組1 2022～23年 道の駅とよはまの商品開発 ● フィールドワークの実施 ・ 香川大学全学共通科目において、自治体等と連携し地域理解や地域課題解決を目指す「瀬戸内地域活性化プロジェクト」を履修している学生のうち、「観音寺班」と「さぬき班」に所属する学生が、「それぞれの活動している地域について理解したい」という思いがきっかけとなり、観音寺市・さぬき市の両市で フィールドワークを実施 。 ● 海鮮丼、海鮮鍋の開発 ・ 訪問した道の駅「とよはま」の駅長が学生に声をかけ、両市や大学の食材・素材を生かした海鮮丼の開発に至った。同年には海鮮鍋の開発にも取り組んだ。	取組2 2023年～継続中 道の駅大坂城残石記念公園におけるにぎわいづくり ● フィールドワーク、座学の実施 ・ 香川大学全学共通科目において、自治体等と連携し地域理解や地域課題解決を目指す「瀬戸内地域活性化プロジェクト」を履修している学生のうち、「土庄班」の学生が 道の駅「大坂城残石記念公園」のにぎわいづくりを目的に 、同市地域おこし協力隊等の支援のもと 周辺のフィールドワークや、道の駅に関する理解を深める座学 に取り組んだ。 ● 「石垣チョコ」の開発 ・ にぎわいづくりのきっかけづくりを目的に、 地域の特色である石を生かした商品開発 ができるのではないかと検討を重ね、大坂城に使われた石垣を模した「石垣チョコ」の開発に至った。 ・ 開発は、土庄町、四国地方整備局、オリエンタルコンサルタンツ、ロッテ、ハレヶ山商店、春日堂、パオ・フィール、大学・地域協創プラットフォーム香川の援助を受けて商品化。
--	---

● 連携体制・関係者

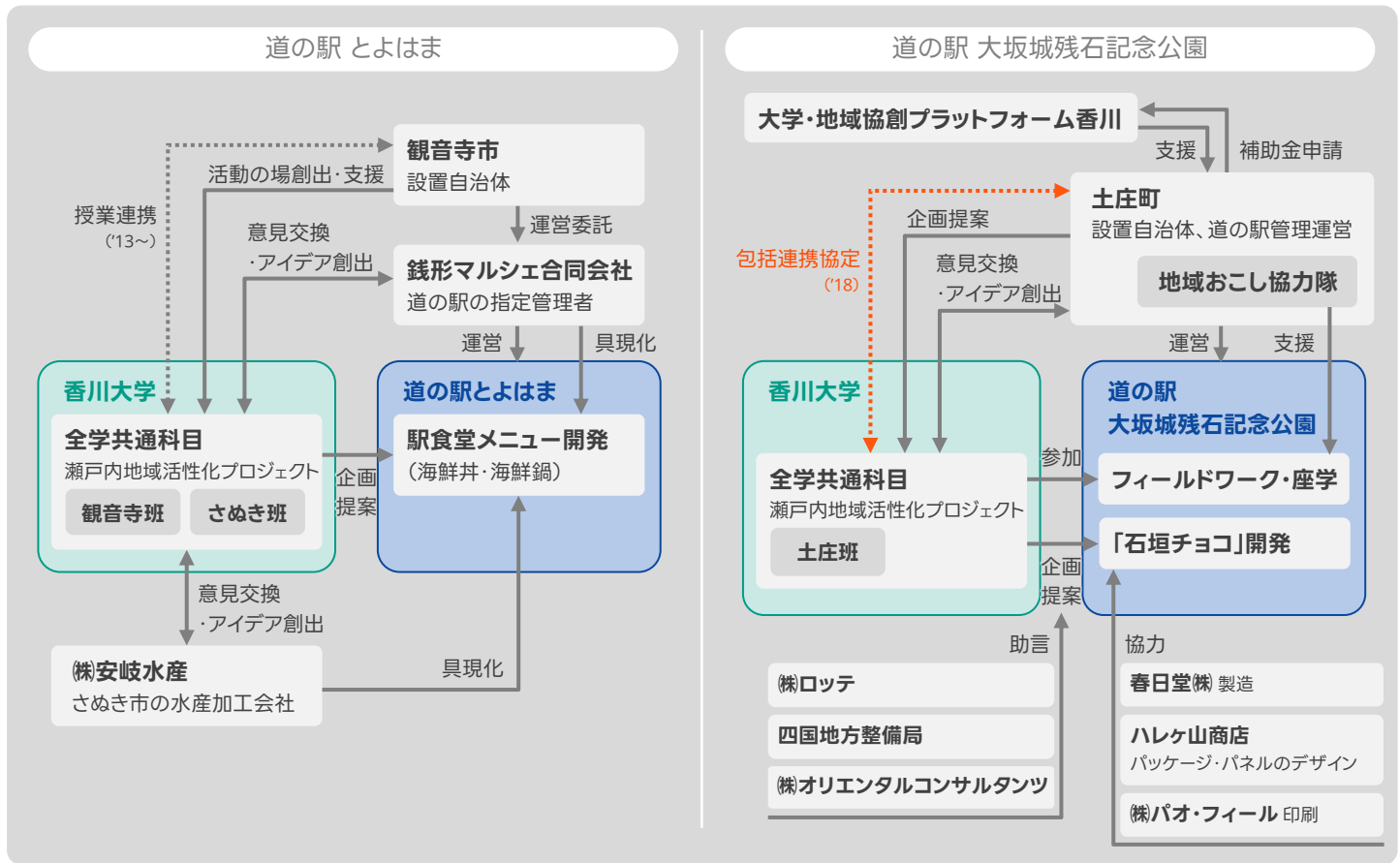


写真1 道の駅「とよはま」海鮮丼(22)



写真2 石垣チョコ開発に関わったメンバー(25)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 学生のアイデアの具体化へ向けた調整

学生ならではの新鮮なアイデアを実現するには、「現実的には難しい点がある」と学生たちに認識してもらう必要がある。

● 今後の取組・活動の展開

- ・ 観音寺市については、新設される道の駅との連携に関われるように事前準備に取り組む。(香川大学)
- ・ 道の駅「とよはま」(観音寺市)としても、香川大学に町おこしの活性化に協力を依頼予定。(道の駅「とよはま」)
- ・ 道の駅「大坂城残石記念公園」(土庄町)の「石垣チョコ」は、試食会に向けてブラッシュアップを重ねながら売れ行きを見守ると同時に、引き続きにぎわいづくりに取り組む。(香川大学)
- ・ 開発した商品の販路拡大を目的としたPR方法の考案、石をモチーフにした新たな商品開発を香川大学と協働して取り組みたい。(道の駅「大坂城残石記念公園」)

14 学生がPDCAサイクルを回しながら 段階的に活動を広げる

愛媛大学 × 道の駅風早の郷風和里

かざはや さとふわり

● 取組概要

道の駅 風早の郷風和里	道の駅 ・地域の課題	活動方針	成果
所在地 愛媛県松山市 開駅年 2003年 設置者 松山市 運営者 風早の郷ふわり協同組合	・少子高齢化、過疎化、人口減少、絆の希薄化などの社会情勢。 ・「あらゆる世代が活躍する舞台となる地域センター」に向けた活動を模索。	・地域の課題解決や活力創出の場として道の駅の在り方を模索、新たな価値の創造や地域づくりを担う人材育成。学生が地元の利害関係者と関わりながら、地域のにぎわいと活性化を創出すると同時に、学生自身もこのPDCAを実践、疑似ビジネスを学習。 ▶ 取組1 取組2 取組3	・学生の道の駅イベント参加により来場者・利用客が増大。2023年3月開催の柑橘まつりでは、1週間前より利用客、売上額ともに16%増。 ▶ 課題 ・毎年メンバーが入れ替わるため、同じような反省・課題が挙がる。 〈工程〉日程にもう少し余裕が欲しい。 〈準備〉準備不足、想定外の事態の発生。 〈広報〉広範囲への宣伝、SNSの積極的活用。 〈その他〉メンバーの参画意識に熱量の差を感じた。協力姿勢が不足、学生も日々忙しい。

連携のきっかけ・経緯 | 地理的に近い、国土交通省松山河川国道事務所から協力依頼

愛媛大学 社会共創学部 環境デザイン学科

種別	国立
所在地	愛媛県松山市
担当教職員	松村 暢彦 教授 羽鳥 剛史 教授
活動人数	35人
研究テーマ	土木計画、都市計画
活動内容	正課・準正課教育

▶ 日頃の活動方針、傾向

- 道の駅と地域の活性化を共通のミッションとして、道の駅と愛媛大学社会共創学部等が公・民・学協働のもと、若者の発想力や学問的知見を活用した活性化の企画・実践を行う。

▶ 道の駅との取組前の課題

- 課題解決の理論（PDCAサイクル）と実践を学ぶ場の創造や学科全体で協力して取り組むことでチーム力の育成。

▶ 活動方針

- 課題解決の理論と実践を学ぶ
▶ [取組1](#) [取組2](#)
- 地域のステークホルダーと協働する
▶ [取組1](#) [取組2](#)
- フィールドワークを通じて地域を複眼的に知る
▶ [取組3](#)
- 実践活動を通じてチーム力を高める
▶ [取組1](#) [取組2](#) [取組3](#)

▶ 成果

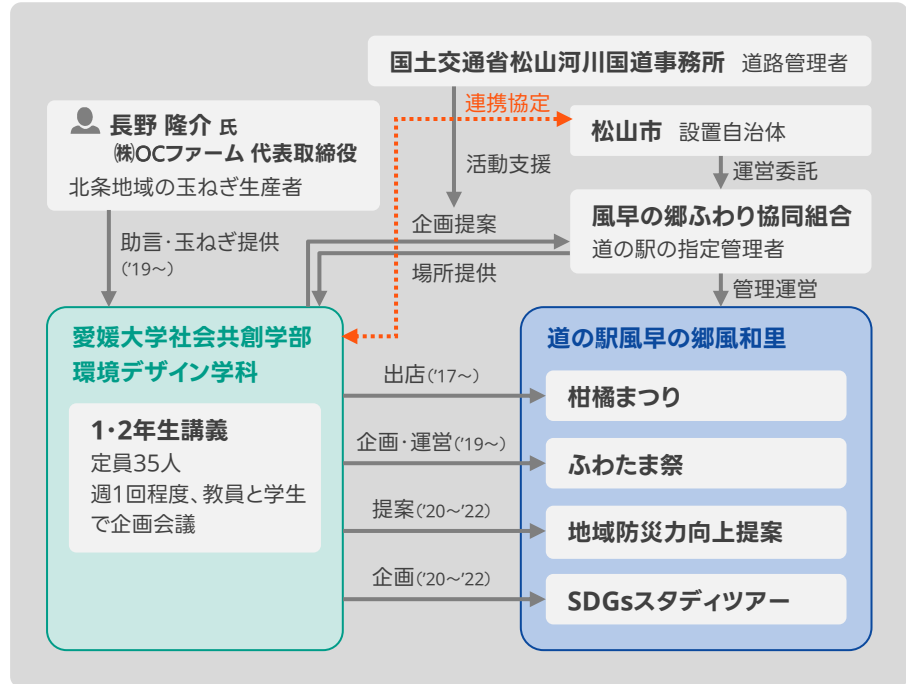
- 理論（PDCA）と実践をつなげて学べた。
 - コロナ禍でも関係者の工夫によって協働関係を継続してプロジェクトを実施。
 - イベントによるにぎわいづくりとともに、西日本豪雨の避難所、復興イベント、柑橘まつり等の活動で相互波及を及ぼした。
- ▶ **課題**
- 柑橘祭り、ふわたま祭りでの出店の収支向上とそのための商品の質を高める機会と時間の確保。

● 取組の内容

取組1 2017年～継続中	取組2 2019年～継続中	取組3 2020～21年
柑橘まつりにおける 商品開発と販売	ふわたま祭における 商品開発と販売	北条SDGsツアー、 地域防災力向上の提案
● 道の駅を知る - 環境デザイン概論（1年生・必修科目）において地域のステークホルダーによる道の駅「風早の郷風和里」に関する講義。 ● 柑橘まつりの商品開発 - 地域のステークホルダーも含めて投票によって企画を決定する。 ● 柑橘まつりでの準備と出店 - 決定した企画の試作を重ね、その年に開催される商品のクオリティをあげる。 - 柑橘まつり当日に出店、販売する。 - 地域のステークホルダーによる来場者向けの振る舞いをサポートする。 ● 振り返り - 柑橘まつりの企画から当日運営までの取組を振り返り、レポートにまとめる。	● 北条地域を知る - 環境デザイン論（2年生・必修科目）において北条地域について地域のステークホルダーの方から講義。 ● ふわたま祭の商品開発 1年生の環境デザイン概論での振り返りを共有する。 - 講義でグループごとにふわたま祭の出展企画を検討する。 - 地域のステークホルダーも含めて投票によって企画を決定する。 ● ふわたま祭での準備と出店 - 決定した企画の試作を重ね、その年に開催される商品のクオリティをあげる。 - 柑橘まつり当日に出店、販売する。 - 地域のステークホルダーによる来場者向けの振る舞いをサポートする。 ● 振り返り - ふわたま祭の企画から当日運営までの取組を振り返り、レポートにまとめる。	※新型コロナによる活動自粛期間の取組 ● 北条地域を知る - 環境デザイン論（2年生・必修科目）において北条地域について地域のステークホルダーからオンライン講義。 ● 北条SDGsツアーの商品開発 - オンライン講義でグループごとに北条地域を対象としたSDGsツアーの企画を検討する。 - 企画を2ページのパンフレットにまとめる。 - できあがったツアーのパンフレットを印刷して、道の駅にて情報提供する。 ● 地域防災力向上の提案 - オンライン講義でグループごとに道の駅「風早の郷風和里」を対象とした地域防災力向上の提案を検討する。 - 提案をレポートにまとめ、発表資料を作成する。 - 提案に関する発表をオンラインにて行い、地域のステークホルダーと情報を共有する。 - 取組を振り返り、レポートにまとめる。

地域	四国
内容	● 商品開発 ● イベント ● 観光振興

● 連携体制・関係者



● 活動年表・開発メニュー一覧

年度	柑橘祭り(2月)	ふわたま祭(6月)	その他
2017	・みかん大福	－	
2018	・みかん大福 ・足湯(フットバス)	－	
2019	・みかん大福 ・みかんピザ ・みかんポム	・玉ねぎスープ ・玉ねぎバーガー ・串焼き ・玉ねぎスムージー	
2020	(未開催)	(未開催)	地域防災力向上提案
2021	(祭りの企画提案)	(未開催)	SDGsツアー
2022	・みかんおにぎり ・ふわふわサンド	(未開催)	SDGsツアー
2023	・みかんプリン ・みかんマフィン ・みかんの木	・玉ねぎブリトー ・玉ねぎカレー ・玉ねぎせんべい ・玉ねぎピザ	
2024	・ジャムナッツ ・みかんアイスの天ぷら	・ジョン(韓国風お好み焼き) ・イタリア風玉ねぎスープ ・オニオンリング	



写真1 ふわたま祭玉ねぎ収穫体験(19)



写真2 ふわたま祭での販売(19)

● 取組のポイント

Point 1 ▶ 正課教育として実施する

実践を正課教育に組み込むことが、理論と実践を学ぶ視点(単なる賑やかに終わらない)、継続性の担保(新型コロナウイルス等の社会経済変化があっても工夫して継続)、学生のモチベーション向上(企画の提案など)にとって重要。

Point 2 ▶ 地域のステークホルダーとの関係性の深化

地域のステークホルダーとの関係性の深化が、外部講師としての役割(講義、授業でのコメント)や事業での効果的な支援(移手段、声かけ)につながる。

Point 3 ▶ PDCAマネジメントの実践

PDCAマネジメントをするうえで、具体的な役割分担とその履行、事前演習含む準備段取り。成功は、リーダーシップ、フォロワーシップの執れるリーダー次第。

● 今後の取組・活動の展開

今後も社会システムを支えるステークホルダーを学び、学生の実践的な協働活動の学習活動として継続していきたい。特に、道の駅周辺の地域ステークホルダーとさらなる連携を進めていきたいと考えている。